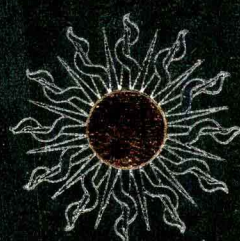
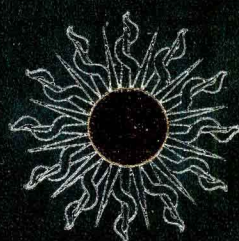
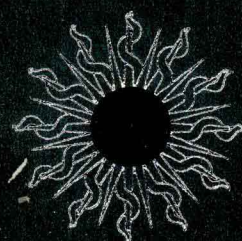
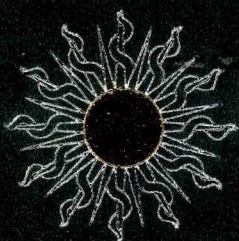
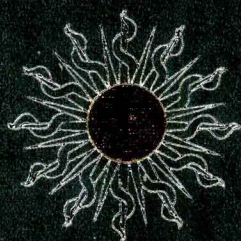




9

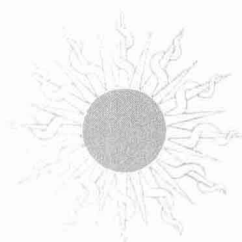


JAPONICA

ENCYCLOPEDIA
JAPONICA



大日本百科事典



6

SHOGAKUKAN



ENCYCLOPEDIA JAPONICA

大日本百科事典

ジャポニカ - 6

© 株式会社 小学館 1980年

昭和43年10月10日 初 版 1 刷発行
昭和55年 5 月 1 日 新 版 1 刷発行

編集者兼 発行者	相 賀 徹 夫
印刷者	澤 村 嘉 一
発行所	株式 小 学 館
郵便番号	一〇一
東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一	
編集・東京 製作・東京 販売・東京	〇三―二二〇―五六二〇 〇三―二二〇―五三三三 〇三―二二〇―五七三九
電話	
振替	東京 八―二〇〇 番
印刷	凸版印刷株式会社
特 抄 紙	王子製紙株式会社
特 抄 紙	三菱製紙株式会社
特 抄 紙	ダイニツク株式会社
表紙 用 箔	独逸顔料工業株式会社
製 本	凸版印刷株式会社

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。

Printed in Japan



カヤ 葉腋についた長橢円形の雄花

が出、しかも幹が岩などについて直立しているため、一見、海藻のようにみえる。日本沿岸には、ウミヒノキ・クロガヤ・シロガヤなどの種類があり、いずれも高さが二〇センチに達するが、小形の種類も多い。

（今島 実）

カヤ〔樅〕 *Torreya nucifera* Sieb. et

Zucc. イチイ科の常緑針葉高木。古名をカ

エといふ。大きいものは高さ三五尺、径二、六尺に達する。樹皮は灰褐色、なめらかで、老樹では縦裂し、薄く長くはげる。一年生枝は緑色であるが、二・三年生枝では赤褐色となる。小枝は、一か所から三本ずつに分かれることが多い。葉は線形で二列に並び、長さ一・五〜二・五寸、幅二・五〜三寸、質はやや堅く、上面は深緑色でつやがあり、先端は鋭く刺状にとがる。下面は淡緑色で二条の淡黄白色の気孔線がある。葉脈は見えない。雌雄異株。雄花は淡黄色、長橢円形で葉腋に多数つき、枝の下面にならぶ。雌花は無柄で緑色、小枝の先端に群がってつき、数層の細かい鱗片をもち、中央に一個の胚珠がある。種子は倒卵形または橢円形、長さ一・三〜二寸、径一〜二寸あり、はじめ緑色であるが、熟して紫褐色となり、外種皮は裂ける。内種皮は堅く、内に胚乳があり、帶黄白色で脂肪に富む。四・五月開花し、翌年一〇月ごろ種子が成熟する。本州の宮城・山形両県以南や、四

「かえ」とともに新年の季語。
六十も童に似たり榎柑子
池西言水

カヤ〔茅・萱〕一般に屋根をふく材料になるイネ科植物のことで、ススキを主とするが、転じてカルカヤ・タマガヤ・キツネガヤなどにもカヤの名がある。

俳諧では秋の季語。

径はやすけし萱の深きをくぐりても 春二
蚊帳 かや 蚊屋・蚊帳・蚊帳とも書き、
いんよう

蚊帳ともいう。寝具の一種で、夏季夜間にカ
を防ぐために、敷いた夜具をおおうもの。あ
らく織った布で、寝室の大きな方形に布を

縫い合わせ、天井の布を縫いつけ、その四隅に乳布を縫いつけ環を通してある。蚊帳を使うには室の四隅の長押や鴨居や柱に曲がり釘を打っておき、これに手という困難の外

もと同じ形で長さ七〇センチぐらいの緑色(萌黄)の丸打ちのひもをかけ、ひもの先は蚊帳の環に通して蚊帳をつり上げて使う。しまうときに

は蚊帳の四隅を一つに寄せて、天井を折り込み、四方の幅を折りたたんでから丈をたたむ〔歴史〕 古くは『日本書紀』に唐から献上き

れた記録があり、『延喜式』の伊勢神宮の袖衣に白絹の蚊帳がしるされている。『嬉遊笑覧』に、「蚊帳の名は皇大神宮儀式帳延喜式

等には見えたれど、むかしは下ぎまには用ゝ
ざりしなるべし」とあり、また『春日権現
験記』には、「白き蚊帳をかけたるかに見

たり。もと蚊帳は今日の如くなるものに非
ず、竹棹たけざおを四角に立て、それに下げたるな
り、吉日をえらびてつりそめ、又吉日に収む

る、昼の間は不用なれば片端の竹を一方に空
せて蚊帳を一所にあつめて裾をとりて片端に
うちかけ置くなり」とある。これを見ても蚊

帳の使用は、南北朝あたりまでは一部上流社会に限られ、大変珍重されたことがうかがわれる。このほか蚊帳に関する記述は、『御産

所日記』『年中恒例記』『東湖隨筆』『守貞漫

蚊帳の需要は京畿の地を中心として、
各地に及び、室町時代に一般に使用されだ

した。さらに江戸時代にはいつて生産も本格的となり、麻蚊帳業として一つの独立した産業を形成した。蚊帳が一般に普及するまで

は、人々は蚊遣火と紙帳で力を防いでいた。紙帳は白紙に墨絵を描き、ところどころ窓を切り抜き、そこに紗を張ったもので、徳川時代までは下級社会でかなり盛んに使われ、一部辺鄙な地方では、明治末期まで使われたという。麻蚊帳が独立した産業になった

当初、奈良からは大和蚊帳、滋賀からは近江蚊帳を産出したが、これらの地方は、現在も仕立て蚊帳の主要な産地になっている。

「つくり」蚊帳の大きさは、並幅の布の幅を縫い合わせてつくるので、周囲の布数で大きさをいう。長方形で間口六布、奥行五布であ

れば、五・六の蚊帳といい四畳半の座敷にする大ききで、これは四畳半いっぱいの大ききよりは小さい。本四畳半つりとか四畳半長押しつりといへば、六・七である。七・八、八・

九、一〇・一二などの大きさがある。近年は座敷の大ききでよび、三畳づり（ $2 \times 1 \cdot 5$ ト）、四畳半づり（ $2 \cdot 5 \times 2$ ト）、六畳づり

(三・二・五畳)、八畳づり(三・五×二・五畳)、一〇畳づり(四×三畳)などがある。
大正ごろから縫い目なし蚊帳といって、大き

きに合せて広く織ったものができて、現今はこれが多くなった。丈は二層内外、長いほうが上等である。

江戸前期ごろまでは、周囲の並幅の布ごとに乳布をつけ、この四隅を天井からひもでつるしておき、日中使わないときには、間口か

奥行を引き寄せ、布を巻きあげておいた。
用布は、古くから麻が使われ、高貴の人に
は絹の紗・絹ちりめんも用いられた。一般に麻は萌黄もめい

色で、緋縮緬・緋木綿などを、乳布や縁布(天井と周囲を縫い合わせる布)鎮(並幅を横布にして裾に縫いつけ風で動くのを防ぐ布)な

どに使用したが、現今は鎮はつけなくなった。
〔種類〕 蚊帳には使用する繊維によつて綿蚊帳・片麻蚊帳・麻蚊帳・合成繊維蚊帳があ

る。綿蚊帳は経・緯糸ともに綿糸を使った平

麻蚊帳は経に綿糸、緯に麻糸を使った平織。必ずしも品質的によいものとはいえない。経

の綿糸の糊が落ちると、緯の麻糸がずれてきて、麻蚊帳より織目の乱れが早い欠点がある。耐久力も価格も麻蚊帳と綿蚊帳の中間の

ものである。麻帳帳は経・緯糸ともに麻糸のものである。昔はおもに手紡糸を用いたが、現在ではほとんど紡績の亜麻、苧麻が主要原糸として使われている。この亜麻・苧麻は需要を十分に満たしていないので、これらの原糸に化繊を混紡した亜麻混紡糸・苧麻混紡糸が大量

量に使われ、これらの混紡糸は蚊帳糸として、中級品の麻蚊帳地に適している。麻蚊帳の特長は丈夫で涼しいこと。蚊帳は他の織物

と違って目をあらく織るが、麻は繊維そのものが硬く丈夫なので、あらく織っても糸が片
 やらず、いつまでもぴんとしている。合成繊

維蚊帳にはナイロン・サラン・ポリエチレン・ポリプロピレンなどがあり、ナイロン蚊帳はからみ織になっているが、サラン蚊帳は

平綯である。色は、いずれも淡し、そのなほ黄になつてゐる。特長は丈夫で風通しがよく、色のはげないこと、虫の食わないことである。ただし熱には弱い。

また、蚊帳は用途によって、座敷用蚊帳・寝台用蚊帳・母衣蚊帳・枕蚊帳などに分けられる。寝台用蚊帳には二種類あり、一般に天

づりというのは、天井からつるした円形のわくに白色の亀甲紗きっこうしゃなどの薄い布をかけて床までたらし、寝台をおおうようにしたものであ

る。寝台の規格の寸法に合わせてつくられている。他の一つは、子ども用に寝台の四隅に柱を立て、これに座敷用蚊帳と同じ形の蚊帳

をかけて床までたらす。母衣蚊帳は子ども用で、長方形の四隅に開く傘の骨形に布を張つたもので、骨の長さ一三六センチが標準である。

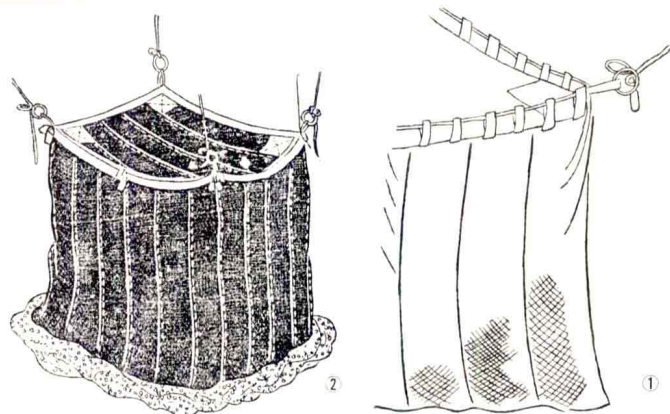
乳児から六歳ぐらいまで使われ、昼寝の虫よけにも使う。

〔民俗〕蚊帳に関する習俗・俗信はさまざま。

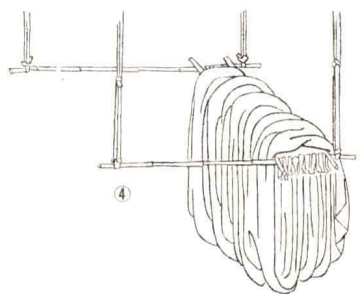
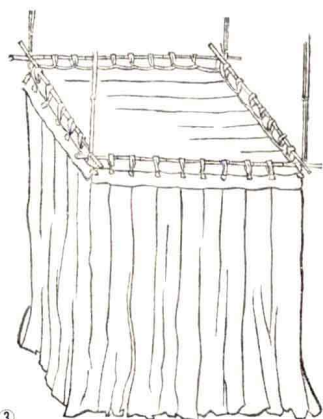
ある。かつて一枚の蚊帳をつくることは、主婦にとって男が一代に家を建てることに匹敵する大仕事とされ、長男の蚊帳をつくるまで

は母親の責任を果たしていないなどといわれ

蚊 帳



- ①桃山時代。乳布が一布に二個ついているのは高貴な人の用いのもの特徴。安土・豊後・寺仏殿に信長奉納の懸額から
- ②江戸時代後期に民間で使われた蚊帳
- ③室町時代の蚊帳のつり方。竹竿に乳布を通し井掛にして、四隅をひもで天井につるす
- ④ ③を使わないときには、図のようにへやの隅に寄せておく（『日本風俗志』による）



江戸時代の蚊帳 歌麿

た。蚊帳は一日に縫い上げないと凶事が起こるとされ、大ぜいの婦人の協力をえて縫い上げると、その蚊帳をつつて、中で女だけの酒盛りがおこなわれる。これを「蚊帳祝い」「蚊帳仕立て」「蚊帳仕立て祝い」「仕立て祝い」などとよんでいた。なお、この際、熊本県玉名郡では、蚊帳の中に挽白とネコをいれ、ネコの頭を打って鳴かせてから出さねばならないといひ、これを「蚊帳の棟上げ」といった。また「蚊帳の祝儀」とよばれる嫁入り蚊帳新調の祝いも、江戸時代にはたいせつな行事として各地でおこなわれた。

蚊帳は古くは竹棹を四隅に立て、これにさげ、昼間は端に片寄せておいたもので、吉日を選んでつりはじめ、また取められた。この習俗は今日でもおこなわれ、ことに五月蚊帳はつるものでないなどといわれている。九月になると蚊帳の四隅に雁を書き付けていることがおこなわれ、カのはいらぬまじないといわれた。また蚊帳を雷よけとしてつることは広く各地におこなわれたが、葬式の時に一隅

をはずした三隅蚊帳の中に棺を安置する風なこともある。これは略式の喪屋の形とみられ、平常はこれをおこなうことを忌む所が多い。このほか、福井県南条郡には盆に二、三人の男子が蚊帳をかぶり、踊りをしている女を追いまわす「蚊帳かぶり」の風習や、広島県因島には六月二三日、一晩じゅう、蚊帳にはいらずに語りあかす「蚊帳待ち」の習俗などがある。

「蚊帳売り」「青蚊帳」「白蚊帳」「初蚊帳」「蚊帳のつり初め」なども同じく夏の季語。蚊帳の中に沈み臥したる疲れかな 虚子 加悦(町) かやちよ 京都府北部、与謝郡にある町。一八八九年(明治二二)町制施行。一九五四年(昭和二九)桑飼・与謝の二村と合併。加悦鉄道が通じる。宮津湾に注ぐ野田川上流の加悦谷に沿っているが、南東には大江山(八三三)がそびえて山がちで、耕地に乏しく、冬は積雪も多く農業はふるわない。しかし、古くから機織地として知られ、とくに江戸時代京都の西陣からちりめん

の製織技術が伝えられてからは、峰山・網野とともに、丹後ちりめんの主産地となった。家内工業的な零細経営が多く、機織場数は約一〇〇〇に達する。人口九三二〇。(織田武雄) ガヤ Gaya インド、ビハール州の都市。州都バトナの南方約一〇〇キロにあり、人口一七万九八四(一九七〇)。バラナシに次ぐヒンズー教の聖地として名高い。ここでは、巡礼者によって先祖の霊がすべての責務をまねかれて天国へ行かれるように、いろいろな儀式がおこなわれる。巡礼の中心はビシュヌ神の足跡をまつるビシュヌバード寺院であるが、巡礼者はさらに市内の何か所(本来は四五か所)かのところにビンダーと呼ばれるお菓子置きを置いてまわる。ビシュヌバード寺院の一きほど西方、ブラフマジュニの丘の麓に永遠の生命をもつとされるバジヤンの木があり、そこが巡礼最終地点とされている。(辛島 昇) カヤオ Cailao 南アメリカ、ペルー中部太平洋岸の港市でペルー第二の都市。人口は一九六一年一六万二八六、一九七二年には

二九万六七一。首都リマの西一二キロにあり、その外港である。南米太平洋岸最良の港の一つで近代設備が整い、ペルーの外国貿易の六〇%以上を取り扱う。軍港でもある。漁港としても重要で、水産物加工(主として魚粉製造)の中心である。造船・食肉かん詰・製粉・醸造などの工業が発達している。この市は一五三七年に創立し、植民時代を通じて太平洋岸最大の港であった。一七四六年のペルー大地震のとき大津波のために、ほとんど完全に破壊され、一九四〇年にも地震で大きな被害をこうむった。(山本正三) 茅ヶ岳 かやがだけ 山梨県北西部にある火山。標高一七〇四。輝石・角閃・安山岩からなり、南西に広い裾野をひく。火山特有のやせ土で水にとほしく、開発がおくられたが、江戸中期に朝穂環が完成し一部が開田された。養蚕やブドウ栽培がおこなわれ、第二次世界大戦後は入植もなされている。中央本線茅ヶ崎から柳平をへる登山コースがある。山岡政喜「カヤキリ」(茅蟲) Pseudorhynchus japonicus 直翅類・キリギリス科の昆虫。本州・四国・九州および朝鮮に分布し、カヤ・ススキなどの草原にすむ。体長ははね先まで六五。内外。体は太くて草緑色、頭頂から胸背にかけて両側に白い線があり、顔面は赤褐色、頭頂には水平に前へ円錐形にとがった突起がある。前ばねはかなり幅広く、先は丸い。成虫は八月ごろに現われ、夕方から草間でジーと強く連続して鳴く。(中根猛彦) 伽倻琴 かやん 朝鮮に古くから伝わる二弦の箏。日本には新羅琴として奈良時代以前すでに伝えられ、正倉院に残されている。伽倻は新羅の一国の名で、この国で中国の箏にならってつくられたという。桐の板の裏側をくりぬいた長さ一六〇センチ、幅三〇センチの穴に麻の緒を通し、これに二本の絹弦を張ったもので、柱によって調弦する。弦名は甲乙丙丁戊己庚辛壬癸天地となっており、雅楽と俗楽とによって調弦も一定しない。右ひざを立ててつり、頭部をひきの上のせて演奏する。今日では歌曲の伴奏や独奏に妓生(朝鮮の芸妓)などによって演奏されている。(黒沢隆朝)

〔表 a〕 化合火薬類の例

分 類	特徴的的化学構造	化 合 物 名	用 途
硝酸エステル	$\begin{array}{c} \\ -C-ONO_2 \\ \end{array}$	ニトログリセリン ペンシリット 綿 薬	ダイナマイトの原料 雷管・導爆線・ロケット ニトログリセリンの膠化剤
ニトロ化合物	$\begin{array}{c} \\ -C-NO_2 \\ \end{array}$	ピクリン酸 トリニトロトルエン (TNT)	導爆線 硝安爆薬の成分
ニトラミン	$\begin{array}{c} \quad \\ -C-N-NO_2 \\ \end{array}$	ヘキソゲン	雷管・炸薬
雷 酸 塩	MeONC	雷 汞(雷酸水銀)	点爆薬
アジ化水素酸 と誘導体	R・N ₃	アジ化鉛(窒化鉛)	点爆薬

注 *Me: 金属原子を示す

かやく「加薬」 かおり、風味を増すために、料理に添えるものごとで、薬味ともいう。湯豆腐に添える花が「お・さらしネギ・おろししょうが・七味とうがらし・もみり、天ぷらに添えるだいこんおろし・ユズの皮・シシの葉などは代表的なもので、タデ・ミョウガ・ラッキョウなど種類は多い。また五目飯にいれる具をかやくといひ、具を入れたものをかやく飯、かやくうどんなどという。そのほか関西では、和え物の和えらるる材料のことをかやくといふ場合もある。本来は、漢方薬を調剤するとき、薬効を増したり、飲みやすくするため、主薬に少量添加する補助薬をかやくといった。

〔松元文子〕

火薬 火薬とは、両方の意味に用いられている。広義の火薬類とは固体または液体の爆発性物質で、一部分に衝撃または熱を加えると瞬間に全体が気体物質に変わり、同時に多量の熱を発生し、気体の膨張力によって有効な仕事をすることをするものをいう。爆発性物質でも爆発の際発生するエネルギーを工業用などに有効に利用できないものは火薬類とはいえない。

火薬類の爆発は主として酸化反応つまり燃焼によっておこるが、燃焼の速度が速く高温になり、急激なガス膨張によって音響や破壊力が発生する現象を爆発とよぶ。そして爆発の伝播速度が媒質中の音速よりも大きくて、強い衝撃波を生じる場合を爆轟とよんでいる。なお、爆発という言葉は一般には圧力の急激な解放をさす。火薬類の場合には、爆発と見える場合でも爆発速度(正確にいえば火炎伝播速度)が音速より小さいときは燃焼という言葉が用いられることが多い。そして爆轟の意味に用いられることが多い。しかし、燃焼と爆轟の両方を合わせて爆発ということもある。火薬学で厳密に定義すれば、後に述べる黒色火薬の爆発は燃焼であり、火砲内の推進薬の燃焼は一般に爆発的であるので爆轟とよぶことがあるが、爆轟ではない。火薬学では燃焼の場合の火炎の伝播速度を燃速、爆轟の場合の伝播速度を爆速という。

〔表 b〕 混合火薬類の例

混合物の組合せ	名 称	用 途
爆発性化合物 +不活性物質	珪藻土ダイナマイト	現在用いられない
酸化剤+可燃物	硝安爆薬、カーリットなど 大部分の混合火薬	発 破 用 (鉱山・炭坑)
非爆発性化合物 +非爆発性化合物	黒色火薬	導 火 線 用 発 破 用
爆発性化合物 +爆発性化合物	ペントライト (ペンシリット+TNT)	高爆速度爆薬

感度・衝撃感度・殉爆性(誘爆)・摩擦感度などの種類がある。感度がきわめて高く、わずかの衝撃で爆発すると運搬・保存が困難なので、ダイナマイトなど実用火薬は一般に化学的または物理的に感度を低くする処置が施してある。一方、爆発に伴う破壊および推進の効果も爆力または猛度と称する。感度の低いものすなわち爆発しにくいダブルベース推進薬などは強力な爆薬(起爆薬)を用いて点爆しないとい爆発しない。起爆薬として用いられる感度のきわめて高い雷汞(雷酸水銀)やニトロマンニツトは中程度の感度のダイナマイトやトリニトロトルエン(TNT)の点爆に使われる。一般に起爆薬用火薬類は爆力小さく、それよりも感度の低い火薬類は爆力大きく、ダイナマイトはむしろ低い感度にもかかわらず爆力大きいという特徴をもつ。一方、貯蔵保管中などにおこる火薬の緩慢な分解に対しては安定度という尺度が用いられ、硝酸エステル類や赤燐などの成分はそれぞれ分解や自然発火することがあり、安定度は低い。工業火薬類の多くは、適当なる安定化処理を施して、分解や自然発火を防止している。

〔火薬の組成〕火薬類を組成によって分けると、単一化合物からなる化合火薬類と、二種以上の爆発性化合物の混合物、爆発性化合物と不活性物質の混合物、酸化剤と可燃物の混合物、二種の以上、非爆発性物質の混合物などからなる混合火薬類との二つになる。

(1)化合火薬類 表 a におもな化合火薬類を示すが、各化合物とも分子中に N—O 結合・N—N 結合など爆発感度・衝撃感度・殉爆性(誘爆)・摩擦感度などの種類がある。感度がきわめて高く、わずかの衝撃で爆発すると運搬・保存が困難なので、ダイナマイトなど実用火薬は一般に化学的または物理的に感度を低くする処置が施してある。一方、爆発に伴う破壊および推進の効果も爆力または猛度と称する。感度の低いものすなわち爆発しにくいダブルベース推進薬などは強力な爆薬(起爆薬)を用いて点爆しないとい爆発しない。起爆薬として用いられる感度のきわめて高い雷汞(雷酸水銀)やニトロマンニツトは中程度の感度のダイナマイトやトリニトロトルエン(TNT)の点爆に使われる。一般に起爆薬用火薬類は爆力小さく、それよりも感度の低い火薬類は爆力大きく、ダイナマイトはむしろ低い感度にもかかわらず爆力大きいという特徴をもつ。一方、貯蔵保管中などにおこる火薬の緩慢な分解に対しては安定度という尺度が用いられ、硝酸エステル類や赤燐などの成分はそれぞれ分解や自然発火することがあり、安定度は低い。工業火薬類の多くは、適当なる安定化処理を施して、分解や自然発火を防止している。

〔表 c〕 硝安爆薬の組成例 (%)

成 分	硝 安 (酸化剤)	木粉・ でんぷん (可燃物)	ニトロ 化合物 (鋭感剤)	食 塩 (消炎剤)	塩化カ リウム (消炎剤)	ニトロ グリセ リン (鋭感剤)
薬 種						
NO. 1	76.2	2.8	9.0	5.0	7.0	—
NO. 2	77.2	6.8	3.2	3.2	4.8	4.8
NO. 3	72.0	4.5	7.5	7.0	9.0	—
アンモン爆薬	85—87	0.5—2.5	7—8	珪素鉄またはアルミ粉を 4—6		

注 NO. 1—NO. 3: 硝安爆薬、アンモン爆薬は食塩などを含まないことに注意

性質物質特有の構造をもち、しかも一分子中に酸素成分と被酸化成分とはいっており、一分子で火薬類としての形をとっている。硝酸エステル類はアルコールに硝酸を作用させて得られ、また芳香族炭化水素に硝酸を作用させるとニトロ化合物が得られる。

(2)混合火薬類 表 b におもな混合火薬類の形態を示す。多くは酸素・硝酸塩・窒素酸化物・過塩素酸塩などの酸化剤と可燃物の混合物。化合火薬類にくらべ一般に爆速は小さいが、衝撃や摩擦に対して敏感で爆発しやすい。おもなものに硝安爆薬・カーリット・黒色火薬・液体酸素爆薬などがある。硝安爆薬は硝酸アンモニウム(硝安)を基剤とし、これに可燃物および他の薬剤を配合したもの、近時日本でも使用されはじめた硝安油剤爆薬(アンフォールANFO爆薬)も、広義にはこれに属する。硝安爆薬には炭坑用として爆発の際坑内ガスへの引火を防止するため減熱・消炎剤を添加した単に「硝安爆薬」と呼ばれるものと、岩石発破用の「アンモン爆薬」とがある。カーリットは日本独自で開発された数少ない火薬類の一つで過塩素酸アンモニウムを基剤とし、これに珪素鉄・木粉・重油を配合したものの用途に応じた表 d に示すような種々の組成のものがつくられている。黒色火薬は硝酸カリウム六〇〜七〇%、硫黄一〇〜二五%、木炭一〇〜二〇%の混合物で、爆発はおこさず、わずかな衝撃

〔表 d〕 カーリットの組成例 (%)

成 分 名	過塩素酸 アンモン	硝酸ナ トリウム	硝 安	ジニトロ ナフタレン	珪素鉄	木 粉	重 油	食 塩	用 途
黒カーリット	75	—	—	—	16	6	3	—	外用
紫カーリット	84	—	—	—	10	4	2	—	坑内用
藍カーリット	28	—	62	5	—	3	2	—	外 用
緑カーリット	12	—	58	9	—	1	—	20	炭 坑 用
特緑カーリット	12.4	1	59.8	9.3	—	—	—	17.5	炭 坑 用

注 緑・特緑カーリットは消炎剤の食塩を多量に含有することに注意

撃で激しく燃焼する。

液体酸素爆薬は強力な酸化剤となる液体酸素を軟質木炭など多孔性の可燃物にしみ込ませて点火・爆発させる。爆発の際の発熱量は爆薬中最大で猛度も大きい。液体酸素の貯蔵・運搬が困難なため坑外採石と土木工事に限って用いられている。

〔その他の火薬類〕このほか重要な火薬類にはダイナマイトと無煙火薬がある。ダイナマイトはニトログリセリンおよびその類似物を基剤として六割以上含有する爆破薬で、きわめて種類が多く、珪藻土・ダイナマイトや硝酸ナトリウムと硝酸アンモニウムを配合したアンモニアダイナマイトなど混合火薬に属するものもある。ダイナマイトは現在工業用火薬類のうちでもっとも重要な地位を占めている。

無煙火薬は混合火薬の一種で発射薬とロケット推進薬として用いられる。基剤に適当な溶剤を加えて膨潤溶解させてから溶剤を除くと緻密な組織をもつ火薬となり、燃焼の際に黒煙を発生せず固体の燃焼生成物も残らなくなる。単一基剤を用いたシングルベース揮発性溶剤推進薬（B火薬など）やニトロセルロースとニトログリセリンなど二種の基剤からなるダブルベース推進薬（コルダイトなど）がその例である。

なお火薬類が燃焼や爆発をおこす際、必要量の酸素分をもっていないか、燃焼・爆発の状況によっては多量に発生する窒素・炭酸ガス・水蒸気のはかに、窒素酸化物・一酸化炭素などの有毒ガスが含まれる。これらのガス全体は跡ガスと呼ばれ、一般には有毒ガスの発生防止のため硝酸アンモニウムや塩素酸カリウムなどが酸化剤として過剰に配合されている。なお坑外用カリットの爆発では塩化水素が、また硫黄鉱山での火薬類の爆発では跡ガス中に硫化水素や亜硫酸ガスが含まれることがあるので注意を要する。

〔火工品〕金属製・紙製または布製包に火薬類を入れ、その燃焼あるいは爆発によって他の火薬類を安全確実に燃焼または爆発させるのに用いる各種火薬製品の総称。

〔導火線と導爆線〕導火線は直径一・五ミリの粉末黒色火薬の心薬を糸や紙で被覆して、ひも状にしたもの。一端に点火すると心薬の

燃焼が進み、他端から発した火炎が接続した雷管や火薬・爆薬を点火・点爆する。心薬の燃焼する速度によって緩燃式と速燃式の二種があり、通常前者が実用され、一瞬燃焼するのに一〇〇〜一四〇秒を要する。

導爆線は混合火薬を心薬としたもので、NT・ビクソリ酸などを細い金属管に詰めたものと、ペンシリットを糸や紙で被覆したもの（ペンシリット導爆線）とがある。爆速は毎秒四・五・五・五と、きわめて大きく、必要量の爆薬を導爆線の一端にしぼりつけ他端を雷管によって点爆すれば、多量の爆薬をほとんど同時に爆発させることができる。

〔雷管〕火薬類を起爆する目的に用いられるもので、アルミニウムまたは銅製の管体・起爆薬・添装薬から構成される混成雷管が主として用いられている。管体の底部に強力な爆薬であるテトリル・ペンシリット・ヘキソゲンなどの添装薬を、その上に雷求・塩素酸カリウム・アジ化鉛・トリニトロロゼンシリンなどの起爆薬を詰めたものである。接続した導火線の火炎で起爆薬が燃焼・爆発し、これによって添装薬を起爆する。導火線を底部に結んだ雷管を、点爆させようとする爆薬の中に押し込んで発火させると、添装薬の爆発によって管体は破片となると周囲の爆薬に激しい衝撃をあたえ起爆する。工業雷管には電気的点火装置を内蔵した電気雷管があり、この場合導火線は不要となり、遠隔操作が自由となる。

〔火薬の歴史〕火薬類の歴史は、きわめて古く、中国・インドでは早くから使用され、その製法が東西に伝わったものと考えられる。記録に残るものとしては、二七五年アフリカヌス J. Africanus の硝酸カリウムと硫黄の混合物についての記載が始まるとされる。六六七年にはカリニコス Kallinikos によるギリシア火（硫黄・ロジン・生石灰・石油の混合物）の発明があり、これを発展させて、一三三三年シュバルツ B. Schwarz が黒色火薬を発明した。以後火薬は黒色火薬が唯一のものとなり、一五四三年には種子島に銃が渡来し、日本に紹介された。一七八六年にはベルトレー Berthollet が黒色火薬に塩素酸カリウムを使用することを発明し（ベルトレー

火薬）、これが最初の爆轟物質の発見であった。その後化学の進歩に伴い雷求（二〇）、ニトロセルロース（二六）、強綿火薬（二六）などの火薬類が発明された。一八四七年にはソフレロ A. Sobrero がニトログリセリンを発見したが、取扱いが危険なため実用には至らなかった。一八六六年ノーベルはこれを珪藻土に吸収させて安全に使用することを見だし、これをダイナマイトと命名した。一八七八年ニトログリセリンをニトロセルロースでセラチン化することに成功した。これが現在のダイナマイトの基礎である。翌年には、早くも日本に輸入されている。その後、黒色火薬はながら続いた火薬の王座をダイナマイトに譲った。またこのころノーベルらによってB火薬（二六）、パリスタイト（二六）、コルダイト（二六）など一連の無煙火薬が、これらそれ銃砲用発射薬として用いられ、これらがその後の発射薬の基盤となった。二〇世紀には、トリニトロトルエン（二六）、ピクリン酸・トリメチレントリニトラミンが炸薬として戦場に現われる。近時はロケット推進薬用の高性能特殊火薬など、多くの新しい火薬が製造されている。

以上のほか火薬類を用いた製品としては花火・発光剤製品（照明弾・色光剤製品）・発煙筒・マッチなどがあり、火薬類ならびにこれら諸製品を製造する工業を火薬工業とよぶ。火薬工業は有機合成工業の一部門で、原料面ではとくに芳香族化合物を多用することなどから染料工業・医薬品工業と密接な関係をもつ。原料・中間体などの相互交換もおこなわれ、また硝酸を必要とするところからアンモニア合成工業と関連があり、したがって化学工業の同一企業内で肥料・染料・顔料・医薬品などともに生産され、火薬類専門メーカーは数が少ない。

なお、火薬類の製造ならびに譲渡・運搬・保管・貯蔵・消費・廃棄など取扱いは全般については、一九五〇年（昭和二五）に制定された火薬類取締法によってきびしく規定されており、火薬類を取り扱うことのできるには有資格者（年齢制限あり）だけに限られている。しかし、近年は無資格者の取扱による爆発事故や保管の不徹底による火薬の盗難、それ

にもとづく犯罪が多発しているのは遺憾なことである。―兵器―

千藤三千浩著『火薬』（丸文、共立出版）▽

木村真著『新火薬読本』（丸文、白亜書房）

加役 加役 歌舞伎用語。立役が女方を、

あるいは女方が立役を演じるなど、俳優が本公演の舞台で自分の本来の役柄以外の役に扮することで「兼ねる」ともいう。初期の歌舞伎では俳優の役柄による分業制度が確立していたが、中期以後、劇場や座組のつこう、興行主の注文などから、加役がおこなわれるようになった。その場合、これは本務以外の仕事だということで、特別手当をもらう習慣が生まれたが、この手当のことも「加役」または「よない」とよんでいる。〔松井俊論〕

課役 日本古代から明治初年まで存在した租税制度の一つで、労役賦課を意味する。古くは役とよばれ、律令制下では中央政府に対する庸・調と、国司に対する雑徭がそれに当たる。荘園の発達につれて大役を含めた公事が現われ、はじめは人頭割りだったのが、段別または戸別割りに変わり、やがて貨幣代納に変わっていく。鎌倉・室町幕府での田畑の段別による段銭、家ごとに課する棟別銭、江戸幕府による国役金は貨幣納の課役である。江戸時代には、天領郷村における伝馬宿入用・六尺給米・蔵前入用金の三役や、江戸府内の公役銀なども課役であったが、助郷課役や村内の夫役などは長く維持された労役である。明治政府の税制改革にもない、しだいに廃止された。

カヤーク 〓カヤック

火薬陰謀事件 かやくいんぼうじけん Gunpowder Plot 一六〇五年、イギリス王ジェームズ一世に対する爆殺未遂事件。一六〇三年カトリック的なジェームズ一世が即位すると、宗教改革以来不遇であったカトリック教徒は境遇の改善を期待した。しかし王は国教への忠誠を宣言したため、彼らは王に失望と怒りをいだき、ガイ・フォークスを首領とする一味は王を議会とともに爆殺する計画を立てたが、事前に発覚して逮捕、処刑された。なお事件の起こった一月五日は今日も「ガイ・フォークスの日」として記念されている。

ば学校・病院からは二〇〇メートル以上離さなければならぬ。二級火薬庫は、それより小型のもので最大貯蔵量は火薬二〇〇、爆薬一〇である。また火薬類の販売業者が市街地に設けるものは三級火薬庫で、最大貯蔵量は火薬五〇、爆薬二五と定められている。艦船の火薬庫では、危険性は陸上の比ではないので、厳重な防護施設が施され、かつ厳格な保管取締りがおこなわれる。弾火薬庫は水面下の装甲の厚い部分に位置し、冷却・注水・散水・ガス抜きなどの装置があり、電気式の遠隔温度計や湿度計などで監視され、庫内はつねに一定の状態に保たれている。大砲の発射薬に無煙火薬が使われはじめたころは、火薬自体の変質や保存管理上の欠陥などから、しばしば火薬庫の爆発によって艦船の沈没事故が発生した。旧日本海軍でも、三笠、松島、河内、筑波などが爆発した。これ以後は火薬庫の管理が厳重になり、第二次世界大戦中の陸奥の爆沈まで事故はなかった。（関野英夫）

火薬工廠 かやくこうしょう 明治政府は火薬の民間製造を禁止し、軍需はもとより民需の火薬のすべてを軍工廠で一手に製造した。一八七六年（明治九）に板橋火薬製造所が完工、東京砲兵本廠板橋属廠として出発したのをかわきりに、七九年（明治一二）目黒火薬製造所、翌八〇年岩戸火薬製造所などが火薬生産にあたった。日清戦争までは鉾山用ダイナマイトなどの民間需要が軍用火薬を量的にしのいでいたが、開戦と同時に民需に応ずることができなくなり、このため大阪砲兵工廠の指揮の下に、九四年宇治火薬工廠が建設され、鉾山用綿火薬を製造、民間の需要にあてた。民間で火薬製造が認められるようになったのは第一次世界大戦の中で、軍工廠だけでは陸海軍や連合国の需要に応じきれなくなってきたからである。専門メーカー「日本火薬」が一九一六年（大正五）から産業用火薬製造をはじめたのがそのはじまりである。

火薬類取締法 かやくるいとりしりほう 明治年間（明治）の日本の火薬類は輸入火薬類として陸軍における官営製造所で製造された火薬類とにたよっていたが、しだいに民間企業に

たつて製造する必要にせまられてきた。そのため一九一〇年（明治四三）に従来の規制を一新して銃砲火薬類取締法を制定し、これは五〇年（昭和二五）まで四〇年間にわたって活用されてきた。しかし、火薬工業などの発展にともない技術的大改正の必要にせまられたので、五〇年に銃砲を切り放し、火薬類だけを規制した火薬類取締法（昭和五年法律第四九号）が、さらに同法施行令（昭和五年政令第三二三号）および同法施行規則（昭和五年通商産業省令第八八号）が制定され施行された。

火薬類取締法はその第一条に明示されているように、火薬類による災害を防止し、公共の安全を確保するために、火薬類の製造・販売・貯蔵・運搬・消費その他の取扱いを規制することを目的としている。

火薬類の製造・販売・貯蔵は、通商産業大臣または都道府県知事の許可と火薬庫所有を義務づけられ、製造方法・製造施設の変更も許可を得なければならず、また製造・貯蔵には一定の資格をもった保安責任者に保安の監督をさせることになっている。なお火薬庫は火薬の種類・数量によって、家屋や学校その他の施設に対して安全な距離をとらなければならない。

火薬類の譲渡・消費・廃棄・輸入は都道府県知事の許可が必要であり、また運搬も公安委員会に届け出て運搬証明の交付を受けることになっている。なお、監督官庁のおこなう保安検査、立入検査、みずからおこなう定期自主検査、行商や混包の禁止、緊急措置など、こまかい保安上の規制がなされており、違反に対する行政処分や罰則もきびしく規定されている。

《伊藤清藏》

伽椰山 かやさん カヤサン 南朝鮮、慶尚北道陝川郡と慶尚南道星州郡にまたがる山で、標高一四三〇尺。山体けわしく怪峰奇岩で連なり、渓谷を流れる紅流洞と南麓にある海印寺は昔から有名である。↑海印寺（魚塘）

カヤック Kayak エスキモーの用いるカヌー。ほとんど一人乗りで、夏の海獣猟に用いられる。長さ七尺、幅五〇センチぐらい、船体は木の骨組にアザラシの脱毛した皮を張ったもので、操縦者は防水ジャケットをつけ、船

身をすっほり埋めるようにしてすわる。操縦のほうは中央の丸い穴の中に足を伸ばし、下半席の前に足踏などの道具をのせる小さな丸い船がある。船体はきわめて軽く、一人で持ち運びできるほどで、船足は速く、しかも重心が低いので、高い波にも耐え、転覆しても、權さばきですぐにもにもどせるといふ。グリーンランドを主とし、カナダのこく、部でも用いられており、また競技もよくこなわれる。↓カヌー ↓カヌー競技 〈中村たかをる〉

カヤツリグサ「蚊帳釣草」 *Cyperus mi-crothia Steud.* カヤツリグサ科の一年草。日当りのよい畑や草地にはえる。葉は緑色、線形でとがる。夏・秋、葉間から茎を直立し、頂に花序をつける。茎は三角形で、基部を除いて葉がなく、高さ六〇センチに達する。花序は数個の枝と、数個の葉状の苞とからなり、枝はさらに分枝して、黄褐色で線形の小穂を多数つくる。小穂の鱗片は長さ約一・五ミリ、鱗片の内側に各一個の三角倒卵形の瘦果がある。本州以南にはえるほか、朝鮮・中国にも分布している。

この類を「莎草」とも書く。夏の季語。鹿取りにかやつり草の秀でけり みづほカヤツリグサ(科) *Cyperaceae* 単子葉植物。イネ科植物と外形はよく似ているが、茎は断面が三角形で中実となり、葉は葉序の三分の一の高さにつき、葉鞘はその縁が合生して完全な筒形となる。花は小穂上の鱗片腋に

単生する。花被片は一般に退化して剛毛状になり、まれには鱗片状、ときにはまったく発達しない。子房は一室で、内部に直立倒生の胚珠一個があり、頂に上半が二〜三裂する花柱がある。果実は瘦果で、内部に一個の種子がある。スゲの類は雌花と雄花の別があり、雌花小穂は退化してただ一個の雌花だけとなり、小穂の基部にあった前葉の变成した果胞(果囊)に包まれ、果胞の先端の孔から花柱がでて受粉する。カヤツリグサの類では小穂の鱗片が左右二列に並び、花の剛毛(花被片)は発達しない。ワタスゲの類では剛毛が多数で白く、伸長する。全世界には約七〇属三五〇〇種、日本には一七属三五〇種内外が分布している。

ガヤヌ ムスガイス

カヤネズミ「蒼鼠」 harvest mouse / *Microtus minutus* 齧歯目・ネズミ科の哺乳類。ヨーロッパ・カフカス北部・シベリア・朝鮮・日本・中国・台湾・インドシナ北部・北ビルマに広く分布する。日本では本州・四国・九州・対馬に分布し、平地より一〇〇〇メートルまでの高所で、ススキ・カヤツリグサなどの茂るところにすむ。頭胴五〜七センチ、尾長五〜九センチほど。尾の上面先端部は裸出し物に巻きつくことができる。吻は短く、耳は丸くて短く、大部分毛に隠れる。体毛は密で柔らかく、体上面は灰褐色で腰が橙色、下面は白色。歯式は $1.0.0.3$ で合計一六本。

長い尾を巻きつけてたぐみに草に登り、また泳ぎもうまい。初夏から秋にかけてカヤ・カヤツリグサなどの地上数センチから一層ほどの茎にカヤ・ササなどの青草を用いて、小鳥の巣のような球形の巣をつくる。巣は径八センチほど、出入り口は側面にあるが、出入りするたびに閉じるのでわかりにくい。冬は地下につくったトンネル内にすむ。食物は草の実などの植物質。妊娠期間は二日ほどで一産二〜六子。

菅野高原

かやのこうげん 青森県の中央部、八甲田火山群の北麓にある高原で、標高約五二〇メートル。もと東津軽郡横内村に属したが、一九五五年(昭和三十)青森市に編入された。青森駅前から十和田湖へ通じる国鉄バスは、約一時間でここに達する。十和田八幡平国立

公園の北の玄関口にあたり、菅野茶屋がある。ここはブナ林を伐採した芝地で、その上にはシナノキの高木が点在し、牛馬の放牧やキャンプ場として利用される。《能登路宇一郎》

茅場町

かやばちょう 東京都中央区中部の一地区。兜町の東にあたり、下町の商業地区の一部。江戸初期、海辺でカヤの茂る地であったこと、また、カヤの販売業者が神田橋付近(千代田区)から移住したことが地名のおこりといわれる。町名は日本橋茅場町。兜町とともに証券業者が多い。地下鉄日比谷線・東西線茅場町駅がある。《浪田 清》

かやぶき

「茅葺」 かやで屋根をふくこと、またはその屋根をいう。厳密にはわらぶきを除く草ぶきのすべて。かやは『古事記』に「訓」葺草、云「加夜」とあるように、昔から屋根をふく材料のすべてを総称した。かやぶきの材料は、カルカヤ・ススキ・アシ(ヨシ)・ウミカヤ・ササなど、地方により時代によつて異なる。かやぶきは山間地方の民家でもつとも広くおこなわれており、多くは農家向きであるが、茶室・数寄屋・神社などにも使われている。かやぶき屋根の構造は地方によつて異なるが、代表的なものは母屋として往六丈ぐらゐのタケ(屋中竹)を約三六丈間隔に配り、たる木として往四丈ぐらゐのタケ(扱首竹)を一五丈ぐらゐの間隔に取り付け、たる木の上に三丈ぐらゐの丸竹を一五丈間隔に並べ、その中間に割竹(木舞竹または實の子竹)を配って縄でからむ。この工程を木舞掻きという。こうして軒先から穂先を上へ一列のふきがやごとく押え竹(牙竹)を使用し、たる木に緊結しながらふきあげられる。屋根勾配は四五度以上あり、ふきあげの厚さは一層以上におよぶものもある。熱遮断・保温性能にすぐれ、また寿命も俗に一代(三〇年)といわれ、柿ぶきの一五年、わらぶきの二〇年にくらべれば長い。

かやぶきが民家の屋根の基調となった背景には、自給自足をよぎなくされた封建社会の民衆の低い経済生活があるが、一方で多くは藩政にみられるように、檜皮ぶきや瓦ぶきは権威を象徴するものであり、一般民衆には許可されなかったという身分制度に由来する面もある。かやぶきには雨水の処理や日射の

防止、地方産素材の活用などに祖先の知恵を感じ、また、厚く大きな屋根や深い軒、郷土色豊かな棟飾りなどに、日本の民家特有の重厚な造形を発見することもあるが、今日の視点では、かやぶきの中に封建社会に閉じこめられた庶民文化の遺産以上のものを見いだすことは困難である。かやぶきは、失火や延焼の点でも危険であり、すでに江戸においても一六六〇年(万治三)には町屋での使用が禁じられており、今日では建築基準法によって都市計画の一定区域内では使用を禁じられている。《川上 玄》

加山又造

かやまただう (一九一七〜) 日本画家。京都市生まれ。一九四九年(昭和二四)東京美術学校卒業後、創作活動にはいり、『月と星』『駝ける』などを発表。近代的手法を大胆に取り入れた新鮮な作風で注目をあびた。その後も『七夕屏風』『雪月花』などで琳派風の日本美を現代に再生する一方、七五年の『白いレースの裸婦・黒いレースの裸婦』では、日本画による人間表現に新機軸を打ち出すなど多彩な活動を続けている。七三年日本芸術大賞受賞。創画会の中心作家。

カヤラン

「樺蘭」 *Sarcocolla japonicus* Midg. ラン科の常緑多年草。暖地の山中岩上または樹上に着生する。茎は長さ七センチ内外、左右二列に葉を互生し、下方からは気根をだして固着する。葉は披針形で長さ二〜四センチ、



幅五センチぐらゐ、堅く、質が厚い。花柄は葉腋からでて長さ三センチぐらゐあって細く、四〜五月のころ、上方に数花をつける。花は淡黄色で、径七〜八センチ。萼は狭長楕円形で先は鈍形、花弁は萼片よりも小さく、側裂片は耳形に三裂し、中裂片は小さく、側裂片は耳形に左右に突出する。和名は、葉の左右について

いる様子が、カヤの小枝に似ているのに由来する。《大井次三郎》

蚊遣

かやり カやブヨなどの害虫を追い払うために煙をくゆらせること。早く『倭名抄』に蚊遣火・蚊火の語がみえ、蚊やりのために火をたいていたことが知られるが、その方法が煙をくゆらせてカやブヨを駆逐するので、地方では「かくすべ」「かいぶし」などといっている。

屋内で蚊やりをおこなうには、古くは火桶・囲炉裏などで香料・木片・鋸くずなどをたいたが、一般には木片を主としてたいて蚊やりとし、東京のような大都市でも大正初期のころまでこれがおこなわれていた。古く蚊やり木にはカヤノキが利用されたが、江戸時代には木材の鋸くずに硫黄の粉末をまぜたもの、また、明治時代にはいつてジョチュウギクの栽培がおこなわれるようになると、その花・茎・葉を粉末にした蚊やり粉(蚊やり香)がつくられるようになり、やがてこれを主剤とした渦巻形の蚊取り線香(蚊遣線香)が広く利用されるようになった。また、蚊やりの用具にも蚊やり豚などがつくられ、江戸末期から大正のころまで一般に愛用されていた。

蚊火

俳諧では、「蚊火」「蚊遣火」「蚊遣草」「蚊遣粉」「蚊取線香」「蚊除香水」などとともに夏の季語。

舟の蚊火

しばらく運を照すなり 秋桜子

粥 かゆ ふつうの飯より水分を多く、やわらかく炊いた米飯。昔は炊(ふかしたものを飯、煮(煮たものを粥)として。和漢三才図会に「粥(かたかゆ)・粥(したるかゆ)・鮑(おもゆ)」とあるのは、硬軟の程度を区別されたことを示し、さらに本式の強飯に対し略式の弱飯の意で、かたかゆを「ひめ」とよび、これが今の米飯で、「しるかゆ」が粥となったといわれている。

関西では、米を昼に炊くのが習いで、朝は炊きなおして粥にして食べる習慣が生まれた。聖武天皇が大仏殿を建てるため、大和の民は粥をすすって米を食いのぼして儉約したのが奈良の茶粥の起原というが、今日では西日本一体に広がっている。また豊臣秀吉が割粥を好んだなどの伝説も多い。

病人食・離乳食の場合には全粥（水は米の五倍）をもっとも堅い粥とし、七倍・一〇倍と水加減を増し、柔らかい、薄い粥をつくることもある。炊く時間は約一時間で、煮たいたらいちど、底をまぜるとよい。白粥は塩を入れないのが本格である。

粥は水分が多く、米そのものが少ないために量をかなりとつても早く空腹になる。中華粥のように、汁に油脂を少し入れると、こくもでるうえ、腹もちもよくなる。（東畑朝子）

〔粥の民俗〕粥には、「カユ」という語の系統以外の方言はなく、「オ」という敬辞をつけることもある。この粥に芋・カボチャ・ダイコン・菜類を混ぜたり、みそ汁のなかに飯を入れたりしたものが雑炊である。↓雑炊

粥を中心とした神社の祭りは粥占神事・筒粥の神事などといい、年占が主になっているが、同じことは庶民の家でもおこなわれている。神社の祭礼のとき粥を神前に供えることも多く、これには、餅・アズキを加えている。このほか粥は特別の日の晴れの食物となっている例は多い。たとえば、長崎県宇佐郡では一月一日を御粥渡りといい「ワタリカユ」または「ワタシカユ」といって朝食粥を食べる。一月七日・十五日・一六日に粥を食べる風習は全国的であるが、群馬県には麦まきが終わった日に「アナフサギカユ」という粥を食べる。また、新築祝いに食べる粥を「ヤワタリカユ」というのもかなり広い範囲でおこなわれている。

粥は、病人・幼児・産婦・老人などによくすすめるが、これは単に半流動食で消化がよいというだけでなく、日本人の米に対する信仰を認めぬわけにはいかない。米は昔は日本人に主食とされた以前に、特定の神祭などの晴れの日の供え物・食べ物であった。それをいくぶんでも日常食としたところに、粥に対する他の食べ物とは異なった感覚が伝えられているのであろう。

粥占 かゆら 年のはじめに粥を炊き、そのぐあいで生産の豊凶を占う行事。神社の場合には、粥占神事・筒粥の神事などといわれ、米を大釜で煮たて、その中に立てた竹筒にはいる粥の量で判定する。その結果は、一覽表にして氏子信者に配布する。民間でも家々でおこなうが、管だめし・粥だめしなどという。

粥すし かゆすし 山形地方の郷土料理。飯に麴・酒・具を加えて発酵させた「なれすし」の一種で、粥状に仕上げるためにこの名があり、さじですくって食べるのが特徴。飯は堅めに炊き、分量で米の割の麴を混ぜてすし桶に入れ、さめたら酒を麴の五倍量と塩少々混ぜたものをかけ、よく混ぜる。レンコン・ニンジン・ゴボウなどを細かくきざんでよく抜き、ユズ皮、種ぬきしたトウガラシ、塩出しした数の子をきざみ、ダイズは炒って飯に混ぜ、さらに酒を前と同量かけて密封し、約三週間放置することができる。（多田鉄之助）

粥杖 かゆえ 小正月（一月十五日）の朝、粥を炊く際に用いた木の棒をいう。これで新嫁の尻を打ったり、女の腰をたたく。すると子どもが生まれるといわれ、平安時代から広くおこなわれてきた。色を塗ったり削り掛けにしたり、男根状につくったりしてくふうをこらしている。粥掻き棒・嫁叩き棒・祝い棒・はらめい棒など、地方によりよび方が異なる。↓祝い棒

粥つけ かゆつけ 秋田県の郷土料理。状態は野菜と野草を加えた粥であるが、酢を加えて数日おき、発酵させてあるため、野趣には富むが独特の味とにおいが、慣れない人には食べにくいほど強烈なものである。つくり方は粥にニンジン・ダイコン・ヤマウド・ゼンマイ・ワラビ・ミズ（東北地方特産の山菜の一種）などを適宜に切ったものに、炒ったクロマメを加えてよく煮て、酢・砂糖・塩で調味する。これを桶に移してふたをし、密封して五日・六日放置しておく。（多田鉄之助）

皮膚病には痒痒のあるものとなないものがある。痒痒物質が生ずるような病変では痒痒がおこるといわれ、ヒスタミン・モルフィン・アセチルコリンを皮内に注射すると痒痒感が生ずる。病的状態における痒痒物質としてはヒスタミン様物質が考えられている。以上は末梢刺激によるものであるが、中枢性の痒痒感もある。かゆみに対する対策としては、原因となっている病気の治療をはじめ、抗ヒスタミン剤・抗セロトニン剤・抗ブラジキニン剤・神経安定剤などが用いられる。なお、かくことにより皮膚炎をおこすこともあり、とくに乳幼児の場合、つめを短く切り、場合によっては両手を手袋（ミトン型）などでおおったり、手かせをすることもある。はしかのあとのかゆみなどには、重曹（約2%）をぬるま湯に溶かしたものでふくとよく、蕁麻疹などには濃くして用いる。虫さされなどには軟膏類を用いる。↓痒痒症

ガ E Gago インドネシア、スマトラ島北部、アチエ省の中部高原地方。ガヨ族が住む。ガヨデウレウト地方とガヨルエンス地方にわかれていて。南はアラス族居住地、その他はアチエ族居住地に囲まれている。ガヨ族の社会は、父系制家族（小氏族）に組織され、政治的にはアチエ族に從属してきた。イスラムを信するが不熱心である。（増田 亨）

通小町 かよいこまち 能の曲名。「かよいこまち」と濁る流儀もある。四番目物。五流現行。季は秋または夏。原作の「四位少将」は観阿弥作。深草少将が小野小町の所に通ったという百夜通いの話は「古今和歌集」よみ人しらずの「暁の鳴の羽ねがき百羽かき君が来ぬ夜はわれぞ数かく」という歌が伝説化したものであり、小町の體に薄がはえて、風にたなびく音が「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはいはじ薄生ひけり」と聞こえたという伝説も、「江家次第」その他に見える。それらにもとづいて創作したもの。山城国（京都府）八瀬で夏籠りをしている僧（ワキ）のもとに、里女の姿で毎日薪や木の束を運んでいた小野小町の霊（ツレ）が、回向を乞うて消え失せる。僧が小町の墓のある市原野にくると、薄の中から小町が現われて授戒を乞うたが、小町をうらんで死んだ深草少将

の霊（シテ）が現われて、これを拒み、百夜通った時のことを再現して示す。結局ふたりの霊は成仏することになるが百夜通いの様子を暗示部分が目玉である。シテは「瘦男」その他の妻味のある面を用いる。特殊演出を示す小書も多い。（安藤常次郎）

花葉 かよう 花を構成する各器官を葉起原のものと考え、花をつくっている葉という意味で花葉 floral leaf とよぶ。そのうち、直接生殖に関係のある雄しべと雌しべ（心皮）を実花葉、生殖とは無関係の花弁と萼片を裸花葉という。またコケ植物（スギゴケ）類の生殖器官を生ずる葉も花葉 perichetium という。茎の頂部に密集してはえ、雌花葉と雄花葉とがある。（西田 誠）

歌謡 かよう たんなる記載文学でなく、口誦性・音楽性をもった詩歌。発生・展開のうえに、労働・遊宴・宗教など、民族集団と関係が深く、また演劇・舞踊などの芸能に随伴することが多い。叙情的と叙事的、短編と長編、定型と非定型、単純な旋律によるものと変化ある旋律によるものなど、内容・形式・音楽面により種類が多い。歌謡のうち民謡はその中核を成し、生活と結びつき、素朴な民衆性が濃い。（日本の歌謡）八世紀成立の『古事記』『日本書紀』の中にちりばめられた歌謡約一九〇首（重複を除く）は、現存の日本歌謡の最古のもので、宮廷の歌謡として歌曲名を持つものが多い。しかし、おおむね、その出自は民謡で、付会された説話とは別の独立歌謡と考えられる。『万葉集』（巻十三など）の歌謡性も色濃く、『風土記』『続日本紀』『琴歌謡』などにその拾遺がある。中古歌謡としては、その前中期に神楽歌・催馬楽の軽快な短唱歌謡があり、ことに催馬楽は文学性も豊かに『源氏物語』に頻出するなど、平安朝人に愛好された。その周辺に東遊歌・風俗歌がある。合わせて四譜と呼ぶこともある。後半期に興歌謡として、今様が登場する。その熱心な愛好者の後白河院は、『楽座秘抄』を撰述して歌詞と音楽面の伝承につとめた。約五六〇首の今様は、他書のもを加えて、当代の風俗・人情を活写して貴重なものである。中世には、

おこなうが、管だめし・粥だめしなどという。粥すし かゆすし 山形地方の郷土料理。飯に麴・酒・具を加えて発酵させた「なれすし」の一種で、粥状に仕上げるためにこの名があり、さじですくって食べるのが特徴。飯は堅めに炊き、分量で米の割の麴を混ぜてすし桶に入れ、さめたら酒を麴の五倍量と塩少々混ぜたものをかけ、よく混ぜる。レンコン・ニンジン・ゴボウなどを細かくきざんでよく抜き、ユズ皮、種ぬきしたトウガラシ、塩出しした数の子をきざみ、ダイズは炒って飯に混ぜ、さらに酒を前と同量かけて密封し、約三週間放置することができる。（多田鉄之助）

粥杖 かゆえ 小正月（一月十五日）の朝、粥を炊く際に用いた木の棒をいう。これで新嫁の尻を打ったり、女の腰をたたく。すると子どもが生まれるといわれ、平安時代から広くおこなわれてきた。色を塗ったり削り掛けにしたり、男根状につくったりしてくふうをこらしている。粥掻き棒・嫁叩き棒・祝い棒・はらめい棒など、地方によりよび方が異なる。↓祝い棒

粥つけ かゆつけ 秋田県の郷土料理。状態は野菜と野草を加えた粥であるが、酢を加えて数日おき、発酵させてあるため、野趣には富むが独特の味とにおいが、慣れない人には食べにくいほど強烈なものである。つくり方は粥にニンジン・ダイコン・ヤマウド・ゼンマイ・ワラビ・ミズ（東北地方特産の山菜の一種）などを適宜に切ったものに、炒ったクロマメを加えてよく煮て、酢・砂糖・塩で調味する。これを桶に移してふたをし、密封して五日・六日放置しておく。（多田鉄之助）

かゆみ かきたくなる一種の不快感で、医学では痒痒という。痒痒感を感じる特殊な受容装置があるわけではなく、皮膚の痛覚を感じる神経終末の弱い興奮によるものといわれる。この興奮が知覚神経によって脳に伝えられ、痒痒感として認識される。実験的には痒痒を感じない程度の弱い電気刺激を痛覚神経に加えると痒痒として知覚されるほか、局所麻酔のきいてきたときと麻酔からさめてきたときの痒痒と痒痒感の消失および出現が同じ時点であることが証明されている。

宴曲（早歌）が鎌倉幕府の武士たちを中心に発展し、室町期に及んだ。長編歌謡で内容もむずかしい。『宴曲集』などの諸書がある。

和歌は前代から興起し、中世に栄えた独自の宗教歌謡で、やはり長編を特色とする。一方短小な叙情歌謡として、催馬楽・今様に匹敵するものは小歌で、『閑吟集』『宗安小歌集』に代表的集成があり、狂言小歌・降達小歌が密接な関係にある。小歌の流れは、近世に注ぐが、三味線の渡来・流行で、洗練された歌曲が分派し発達した。上方歌（地歌）はその前期にはじまり（『松の葉』が代表的な集成）江戸時代に伝播され江戸長唄を発達させた。うた沢や小唄も起こった。一方浄瑠璃系で、常盤津・清元・新内などの歌曲も生まれてくる。箏歌もみのがせない。これら技芸的な歌謡に対し、民間にひろまったのは謡歌で、各地に伝説がある。一方、労働歌謡も中世以降盛行し、これに遊里小歌が結びついて現在の民謡の源泉となった。近代では、民衆の心情を代弁するものとして、民謡・流行歌（歌謡曲）・唱歌・童謡、その他社会生活の広い領域に浸透している。

高野辰之他編『日本歌謡集成』（正一二巻、一六二再刊 続五巻、一六二）（高野辰之著、六至文堂）▽浅野建二著『日本歌謡の研究』（六二）（東京堂出版）

『中国の歌謡』『詩経』は前一〇世紀から前六世紀ごろの作品を集めた中国最古の歌謡集で、各地の作業歌・恋歌・祝歌などの世俗的民謡を集めた『国風』、儀礼的宗教的の歌謡を集めた『雅』、『頌』からなっている。ついで漢代から南北朝にかけての歌謡は、宋の郭茂倩編『樂府詩集』にほぼ集大成されている。管弦の伴奏で歌われる歌謡は漢以後一般に樂府と呼ばれたが、それは民謡出自のものとして文人の手になる芸術歌謡との二種を包括している。樂府の中でも注目するのは漢代の相和歌と呼ばれる楚地方の民間楽曲によるもので、恋歌が多いが、反戦歌・社会風刺歌なども少なくなく社会性と叙事性が強い。南朝の歌謡では呉歌・西曲歌など、揚子江流域の五言、または七言四句からなる短詩形民謡が代表的である。女性の相思別離の情を哀怨に歌

い、糸布Ⅱ思夫のたぐいの掛けことばを多用する。北朝の歌謡は文学的才能に富む鮮卑人による男性的で力強い内容の長短不定詩形のものが多い。唐以後芸術歌謡としては詞と呼ばれる、譜を主伴奏楽器とし、内容上は含蓄を尊び隠喩・象徴の手法を常用する歌謡が流行し宋代がその最盛期であった。一方民謡出自の歌謡としては唐代四川に流行した竹枝詞以来各地の民謡が宋・元・明・清を通じて俗曲の形をとり発展してきた。とくに元代に雜劇などの戯曲にこれら俗曲が採用されるようになると、曲と呼ばれて明・清代まで大いに流行した。これは詞にくらべると用語も通俗的、内容も表現も自然さも写実をより重んじており、叙情だけでなく叙事・風刺の内容をもつたものも少なくなく、彈詞・鼓詞などの語り物の歌曲部分にも用いられる。なお民謡は、中華人民共和国成立後、詩歌の源泉として高く評価され、従来の民謡の旋律に手を加え新しい内容の歌謡をつけた新民謡が全国的に大量に生み出されている。（村松一弥）

『西洋の歌謡』歌謡という表現は、ヨーロッパの音楽曲にも用いられることがある。なかでも、芸術歌曲に対応する言葉として、時代的に古いものや、あるいは民謡とのつながりが強いものや、あるいは民謡とのつながりが強いものを呼ぶことが多い。その場合英語ではソング・ソングがこれにあたるが、ドイツ語ではゲザング・Gegang フランス語ではシャンソン・chanson またはエール・air イタリア語ではカンツォーナ・canzona が使われるのがふつうである。一般的に、歌謡では歌詞と音楽の関係が芸術歌曲ほど密接で有機的ではなく、形式的にも単純なものが多く、有節形式をとることがふつうである。一七世紀ごろフランスで盛んに作曲された単純で、しかもみやびやかな独唱歌曲を、宮廷歌謡と呼んでいる。エール・ド・クール・air de cour と呼ばれるこの種の音楽は、リュートの伴奏にもつく有節歌曲として登場し、宮廷を中心に栄えたが、のちに、ハーブシコードの伴奏に変わり、さらにバイオリンなどがこれに加わる場合もあった。フランスの宮廷歌謡は、つづいて厳粛な歌謡（エール・セリュー・air sérieux）、酒の歌（エール・ア・ボアル・air à boire）、恋歌（プリユネット・brunette）、ロマンス（romance）といった形で受けつがれて一八世紀から一九世紀にまでもおよんでいる。また一六世紀後半から一七世紀はじめにかけて、イタリアに現われる独唱と伴奏のマドリガル、あるいはドイツでおこなわれていた単純な世俗リートも、歌謡という名でとらえることができる。さらに、一六世紀後半、イギリスで歌われたエア・air も歌謡風のスタイルをもっている。なお三つ部分からなる歌曲形式を歌謡三部形式（三つ）というところもある。（海老沢敏）

賀陽（町）（かようちやう）岡山県中部、上房郡にある町。一九五五年（昭和三十〇）豊野・上竹・下竹・吉川・大和の五村が合併して町制施行。古備高原上に緩傾斜する竹荘盆地を中心とし、水田のよく開けた農村地帯で、タバコ・酪農・果樹作も盛んであり、農協が中心となつて、積極的な農業構造改善に取り組んでいる。また、マツタケの産出も多い。人口八七五四。（歌野通博）

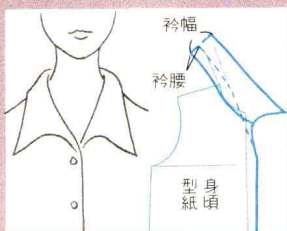
歌謡曲 かようきょく 大衆にひろく歌われることを目標に、原則として日本人の手によつて作詞・作曲され、レコード・ラジオ・テレビなどの媒体を通じ、日本の歌手によつて伝達される歌。明治文化による西洋音楽の移入により、洋風旋律になんできた大正期の音楽家のなかから、それまでの詩吟・浪曲・演歌・寮歌・唱歌・民謡などは別に、しかしそれらのものを基調として、日本独特の大衆曲が生まれるようになった。この大衆曲は、はじめ大まかに流行小唄・流行歌とよばれていたが、昭和には第二次世界大戦中から歌謡曲の呼称が用いられるようになった。明治末期までの「はやり唄」とは異質のものであり、また現在の「ホーム・ソング」や「ジャズ」「ポピュラー・ソング」なども相違するのが歌謡曲といわれているが、定義は定かでない。

歌謡曲の発生は、一九一四年（大正三）の『復活』劇中歌「カチューシャの唄」に始まったといわれ、昭和にはいって「君恋し」（三三）『雑誌連載の小説を映画化のあり、とくにその主題歌としてつくられ全国を風靡したため映画主題歌第一号ともいわれる』『東京行進曲』（三六）『股旅もの歌謡曲の草分け』とされている。『香掛小唄』（三六）『新楽器ギター』を初めて取り入れてヒットした『酒は涙か溜息か』（三三）とつづき、『涙の渡り鳥』（三三）『サーカスの唄』（三三）『赤城の子守唄』（三三）『旅笠道中』（三三）など、代表的ヒット歌謡曲があいついで生まれ、歌謡曲の黄金時代を現出した。軍歌一辺倒にひときかった第二次大戦の後半期でも、大衆は『湖畔の宿』『支那の夜』『旅の夜風』『愛染かつら』といった、ロマンと哀愁味ただよう歌謡曲を愛唱したが、これは歌謡曲が、大衆の心のいともなり、また逃避の手段とするのを立証している。戦後は、『りんごの歌』（三四）が、疲労しきった人の心をふり立たせる役割をし、その後、『湯の町エレジー』『青い山脈』『りんご追分』『君の名は』『お富さん』『別れの一本杉』『有楽町で逢いましょう』『黒い花びら』『潮来空』『王将』などが、時代をつくる人気歌謡曲となった。

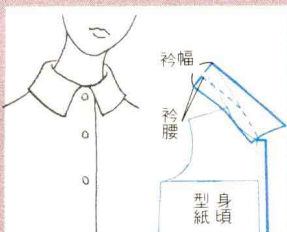
歌謡曲の作曲者としては、中山晋平・古賀政男らが、それぞれ晋平がし・古賀メロディーとして一時代を画し、作詞者としては、西条八十・佐藤惣之助・高橋掬太郎・佐伯孝夫らが、数多くのヒット歌謡を生んだ。歌謡曲の流行によつて、大衆の人気を得たレコード歌手も数多い。そのなかでも、藤山一郎・東海林太郎・淡谷のり子・美空ひばりは傑出した人気を得た。歌謡曲の発生当時は、大衆の間に、ひろく歌われていたものを、レコード会社でレコード化し、流行に拍車をかけたものであるが、今日では、レコード会社やラジオ・テレビ局、あるいは音楽出版社が、大衆の歌のそとをきりつつ、独自の企画によつて制作し、売り出すことに主力がおかれている。したがって、大衆の底辺にあるものを、直截に表現することを望むことは困難になっている。と同時に、従来の歌謡曲独自の作曲形態・唱法も、ルンバ・マンボ・チャチャ・ゴーゴーといった新しいリズムの移入によつて、大きく変わってきており、歌謡曲の呼称も、今日では、ひろい意味に解釈する必要が生じてきている。歌謡曲の本質は、大衆がその時代からの忘却や、逸脱のために歌うもの、その生きている時代が苦しいれば苦しいほど、安易で甘美なものになるもの、

カラ ― 現代

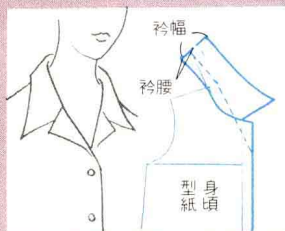
ウィング = カラー



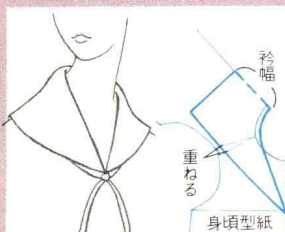
ステン = カラー



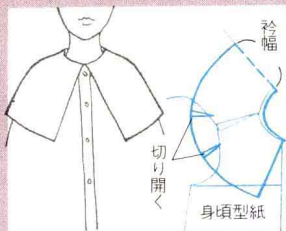
オープン = カラー



セーラー = カラー



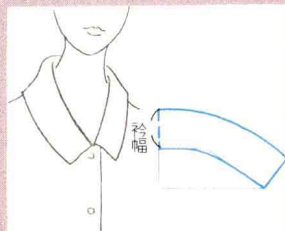
ケーブ = カラー



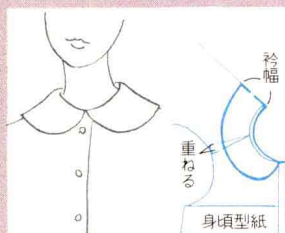
タイ = カラー



ショール = カラー



フラット = カラー



とされているが、この激しいマスコミュニケーションの発達下ではその歌の流行によって時代相をうんぬんし、広く歌われる原因を見きわめることも、至難で不自然となった。

↓流行歌 〈丘灯至夫〉
高橋碩一著『流行歌でつづる日本現代史』(文芸・音楽評論社)▽丘十四夫著『歌暦五十年』(元語・全音楽譜出版社)

画用紙 画用紙は一般に消費材と考えられているが、絵画用の紙は保存材の性質をもつものでなければならぬので、上質紙が使われている。西欧のものはエジプトのナイル川河畔に野生したパピルスが古代の紙原料であったことが判明しているが、一方、動物皮をなめて用紙としたパルシュマン(羊皮紙)の流れがある。今日ではワタ・アサ・薬・木材パルプを主原料に、すき方や配合材によって木炭紙・水彩紙・版画紙・一般画用紙などの各種がつくられている。これらは用途によって、紙面のざらつき・厚薄・吸水性などが異なるので、目的に合致したものを選ぶ必要がある。

日本の画用紙としては水墨紙・和唐紙・画

仙紙・書院紙・麻紙・鳥の子・玉版箋などがある。いずれも手すきで、西欧のものがほとんど短繊維を用いているのに対し、植物性長繊維である点に特色がある。〈寺田春武〉

嘉峪関 かよくかん チャウイコワン 中国甘粛省蘭新鉄道沿線の新興工業都市。酒泉地区に属する。祁連山脈中にある鏡鉄山の鉄鉱の大規模な調査と開発が一九五六年に始まり、五八年に包頭とほぼ同規模の鉄鋼コンビナートが設立され、その発展にともない酒泉市から北大河の西岸地区が嘉峪関市として独立した。もの。万里の長城西端の関門の一つである嘉峪関がこの地にあり、市名はそれにもとづく。

加羅 から 古代の朝鮮南部、洛東江流域一帯にあった諸小国。『魏志』東夷伝によれば、半島南部には馬韓・辰韓・弁韓があり、四世紀半ばごろ馬韓の地から百濟、辰韓諸国から新羅が統一王国を形成した。弁韓の諸小国は微弱な連合体をなしていたらしいが未統一のまま、進出した倭(日本)の領域となった。広義の「から」はこの地をさし、最盛期には故三韓のほぼ全域におよんだらしい。『三国史記』は加羅の故地として咸寧・金海・高靈・咸安の四つをしるすが、代表的な存在は金官加羅(金海)と高靈加羅(大加羅)で、前者は五三二年、後者は五六二年に新羅によって併合された。〈村山正雄〉

カラ(海) Kara 北極海の付属海のひとつで南はシベリア、東はセベルナヤゼムリヤ、西はノバヤゼムリヤで囲まれる。北緯八〇度以南の面積は約七五万平方キロ。水深二〇〇メートルの大深層が発達している。オビ・エニセイの大河が注ぐ。冬季は海水でおおわれるが、夏七〜九月は南部で船の航行が可能である。南から北へ向かう弱い海流がある。沿岸のデイクソンは航路上の主要な中継地。〈楠 宏〉

カラー collar 保護・装飾の目的を問わず元来頸部の周囲にめぐられるもののことをいう。布片・首飾り・首輪なども含めるとも普遍的には洋服の上着やシャツなどの「えり」の部分を含んでいる。しかし、厳密に言えば、本質的に構造を異にする和服と洋服では、日本語の「えり(衿)」がそのままカラーと同一であると考えるのは誤りである。た

たとえばテラード服の折り返しの前側は本来ラベル label であって背側の折り返しだけがカラーといわれる。それを「えり」と呼称する習慣が生じているのは、明らかに「えり」という日本語の包括性に起因すると考えられる。語源は首を意味するラテン語のコラレ colare であり、中世英語では colder と続いたが、これはフランス語の col により近い。古代ローマ人は首やのどを保護する目的でフォカレ focale という頸布を用いた。またサクソン人のあるものは奴隷の印に鉄製の輪を首に巻き、中世以後は宝石を飾った帯状の首飾りを首にかけた。これらはすべてカラーなる語の発生にかかっている。

このような意味でのカラーには歴史とともに各種のものが存在する。中世までの典型はネックバンドや頸布であり、ルネサンスになるとラフ・ルーフという髷えりが盛んに使われた。また一七世紀になるとこれらのほかにレースやレースつきのカラーも用いられるようになる。これらの形、大きさ、首元での角度などもさまざまであり、おおむね近世の間を通じて用いられた。当時は男子のコートには折り返しのラベルはなかった。ところが一八世紀も、七、八〇年代になると立ちえりやラベルが現われ始め、フランス革命直後から一九世紀初頭にかけてのハイカラーが、それを一つの決定的な特徴たらしめることになった。彼らは頸が没するほどの高さに頸布を巻きつけたのである。この状態は大なり小なり一九世紀半ばまで続き、近代の替えカラー式になるのはそれ以後のことである。このようにして今日カラーは身頃に縫いつけられていても、離れた別布であって、カラーとして取り扱われる。したがって、前述のラベルや、いわゆるネックラインそのものとは関連に区別しなければならぬ。この意味でのカラーの種類はきわめて多様であるが、分類すると別表のとおりになる。

えり首の汚れを防ぎ、防寒や日やけを防ぐとともに顔のことも近い位置にあつて顔を引き立たせ、服飾デザイン上、重要な個所の一つとなっている。

その形は多種多様で、衣服の種類・用途・

カラーの分類

高さから

マンドリン	C	mandarin C
チン	C	chin C
デコルテ	C	décolleté C
バーサ	C	bertha C
ステム	C	stem C

仕立てから

テーラード	C	tailored C
ドレープ	C	draped C
ラグラン	C	raglan C

操作から

アタッチド	C	attached C
リバーシブル	C	reversible C
コンバーティブル	C	convertible C
スタンド=アウェー	C	stand away C
スタンド=アップ	C	stand up C
ダブル	C	double C
ターン=バック	C	turn-back C
ロール=アウェー	C	roll away C
ロール	C	roll C

形体から

ウィング	C	wing C
バンド	C	band C
ノッチド	C	notched C
ケープ	C	cape C
ショール	C	shawl C
フィッシュ	C	fichu C
スカーフ	C	scarf C
ストール	C	stole C
セーラー	C	sailor C
ビブ	C	bib C
フラット	C	flat C
シャツ	C	shirt C
ボウ	C	bow C
タイ	C	tie C
リップド	C	ripped C

固有名詞から

チャイニーズ	C	Chinese C
イートン	C	Eton C
グラッドストーン	C	Gladstone C
ダッチ	C	Dutch C
ナポレオン	C	Napoleon C
ピーターパン	C	Peter Pan C
メディチ	C	Medici C
バンダイク	C	Vandyke C
タキシード	C	Tuxedo C

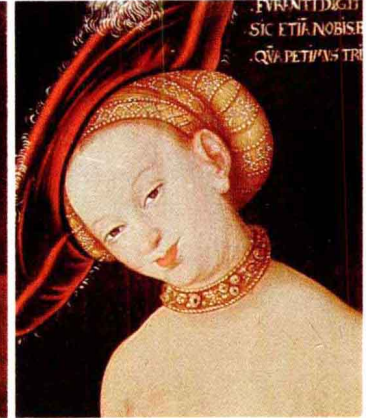
注 Cはカラーの略

デザインにより、また着る人の顔かたち、年齢によって選ばれる。
〔種類〕(1)ウィングカラー 前縁が鳥の翼をひろげた形に浮いているカラー。もともと男子の正装に用いられたが、現在ではその変型が婦人服に用いられ、日本では一九五一年(昭和二六)ごろ流行した。(2)オーブントカラー 開きえり。男女ともに用いるが、とくに

男子の盛夏用の半袖シャツでこのえりをつけたものを開襟シャツという。(3)ケーブカラー ケープのように肩をおおうもので、婦人用マント・コートにつける。(4)ショールカラー(へちまえり) 表えりのカラー(上えり)とラベル(下えり)・見返しまで続けて裁ち、縫い目も刻みもない。えり腰は低く、全体にゆるい曲線を描き、やわらかい感じのえり。

(5)スタンドカラー つめえり。男子学生服や中国服・軍服などにみられる。(6)ステンカラー 第一ボタンをとめると立ちえりになり、はずすと開襟型となる。スポーティな感じのえり。(7)セーラーカラー 水兵服のえり。うしろが四角に背に垂れている。イギリスで海軍の水兵服をまねて一九〇〇年ごろから少年・少女の間に流行し、日本では戦前

カラー (17~19世紀)



〔右上から下へ〕

■17世紀中期のフランスのレースつきカラー ■16世紀初期のドイツのネックバンド ■17世紀初期のイギリスのレースつきカラー ■17世紀初期のオランダのひだえり(ルーベンス夫妻)

〔左上から下へ〕

■19世紀初期のフランスのひだえり ■18世紀末期のフランスのひだえり ■18世紀末期のフランスのラベルつきハイカラー(ロベスピエール)



カラー *colla / Zantedeschia* サトイモ科の春植え球根草。サンデシア属のなかで園芸的に栽培されている種類をさし、和名カイウ(海芋)という。南アフリカ原産で寒さに

〔田中千代〕



カラー 四季咲きのナルドシアナ



カライトソウ 夏に美しい花序をさげる

は弱い。オランダカイウ *Z. aethiopia* Spr. は水湿地によく育ち、葉は高さ七〇〜八〇センチ、夏、長い花柄の先に、漏斗状の白い仏炎苞をつけ、そのなかに黄色の肉穂花序をたてる。日当りのよい池の縁に植えるときよい。シキザキカイウ（四季咲き海芋） var. *minor* Engler f. *chilidiana* Hort. は温室や暖地のビニールハウスで、一五度C以上の温度と、十分の湿度を与えると、冬でも葉は枯れずに開花する。シラホシカイウ（白星海芋） *Z. albo-maculata* Baill. は、葉に白い斑紋がはいっている白花で、六〜七月に開花する。このほか白斑紋葉で黄色や桃色の花もあり、花壇植えによいが、小形なので鉢植えにしてもよい。戸外栽培のものは冬は枯葉を切って上から土をおおうか、球根を掘り上げて暖い場所にかわかないようにして貯蔵する。〔清水基夫〕

カラール Paul Karrer（ハル―カ―）スイスの化学者。モスクワに生まれたが幼少の時にスイスに帰った。チューリヒ大学のウェルナーのもとで化学を学び、その後エーデルヒヒのもとでサルバルサンなどの化学治療剤の研究に従事した。一九一九年にはチューリヒ大学教授となり、糖類およびアミノ酸の立体構造の研究を発表。三十七年には「ハース」といってビタミンAおよびカロチノイドの研究によりノーベル化学賞を受賞。著書として『多糖類の化学への入門』（一九二〇）『有機化学教本』（一九二七）が有名。〔広田 穰〕

をまぶして水けをとってから揚げる。切り身の場合は全体に火が通ってからとすればよいが、小魚の場合には骨まで食べられるようにすることが多い。骨まで食べられるように揚げるには、二度揚げにするとよい。はじめはやや低温の油でゆっくり揚げ、いったん油からとり出し、次にやや高温の油で揚げる。から揚げしたものは、そのまま食べることも多いが、煮込み・あんかけ・酢つけの材料としても用いる。〔東畑朝子〕

カラールアザール Kala-azar 内臓リーシユマニア病のことで、イギリスの軍医リーシユマンによってインドで発見され、ドノバンによって確定された原虫リーシユマニアドノバニ *Leishmania donovani* の寄生によっておこる伝染病の一種。語源は「アッサムの土語で、カラは黒い、アザールは病気の意」。黒熱病ともよばれた。流行地は中南米・地中海沿岸・中近東・フィリピン・インドや中国の揚子江以北などで、日本でも第二次世界大戦後はこれらの地域からの帰還者に患者がいた。吸血性昆虫、とくにサシチョウバエ（スナバエ、中国では「白蛉」）の媒介によって患者または病犬から伝播される。潜伏期は不定で、二週間から数か月である。症状は、不規則な高熱が長期間続き、肝臓・脾臓がはれ、しだいに貧血が強まり、皮膚が暗褐色となってやせてくる一方、むくみがみられる。治療には五価のアンチモン製剤が特効薬で、貧血の対症療法もする。〔柳下徳雄〕

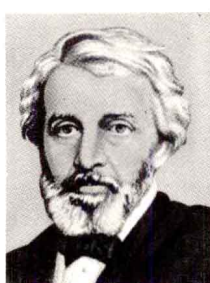
柄合せ がらあわせ 縫い目で着物の柄を美しく合わせる。女物の長着・羽織・コートなど、小紋・友禅・緋・緋・格子・紋織など、柄のくりかえして表わされている美しさを各

縫い目でくずさないように合わせ、また大柄は着た姿が美しく見えるように配置して裁つて縫うことをいう。公家の男女の装束には紋・二重織など紋様を織りだしたものが多く使われ、これを正しく柄合せして仕立てることを唐から学んだらしく、正倉院にある染織品の裁縫（施・綴・袋）などに美しいデザインをみるが、この感覚が衣服のうえにも生かされ、今日に続いている。桃山時代から新興武士・町人などに美しい小袖文化が開かれ染織の美しいものが裁縫されている。しかし当時中国から輸入し国産化されるようになった紋・縮緬の小袖を裁縫するのに、並幅の用布の丈を二つ折りして身頃・袖を裁ち、同じ耳からえり肩あきをあけて背縫いをするので、左右の紋柄が、一方はさかきになっていて、袖に対しては正しく柄合せがしてない。それが仕立屋やそれを学ぶ多くの女子の間に今日もなおおこなわれていて、既製品の長着・羽織・打掛けに至るまで柄合せができていない。多くの裁縫家が明治以後出版されているが、羽織の柄合せまで正しく書かれたものがないのが現状である。↓和裁。〔堀越すみ〕

柄井川柳 からいせんりやう 川柳。カライトソウ「唐糸草」 *Sanguisorba hakuensis* Makino バラ科の多年草。全草はほとんど無毛、根茎は肥厚し、茎は高さ五〇〜九〇センチ、直立し、少数の葉を互生する。根生葉は有柄で大きく、茎葉は小形である。小葉は羽生し、七〜一三個、三〜七のの小柄をもち、長楕円形または卵状長楕円形で長さ三〜六センチ、粗鋸歯があり、下面は粉白くおびる。茎上は分岐して数個の花穂をつけ、花穂は長円柱形で長さ五〜一〇センチ、柔軟で下垂する。花は紅紫色で八〜九月に咲き、花穂の先のほうから開く。雄しべは六〜一二個、花糸は長く、長さ七〜一〇センチ、上方は扁平で広くなり、約はかわくと黄褐色になる。和名は花糸が唐糸に似ていることからつけられた。本州の高原にはえ、観賞用として庭に植えられる。朝鮮に変種のコウライカライトソウ var. *coreana* Hara がある。〔榎山泰一〕

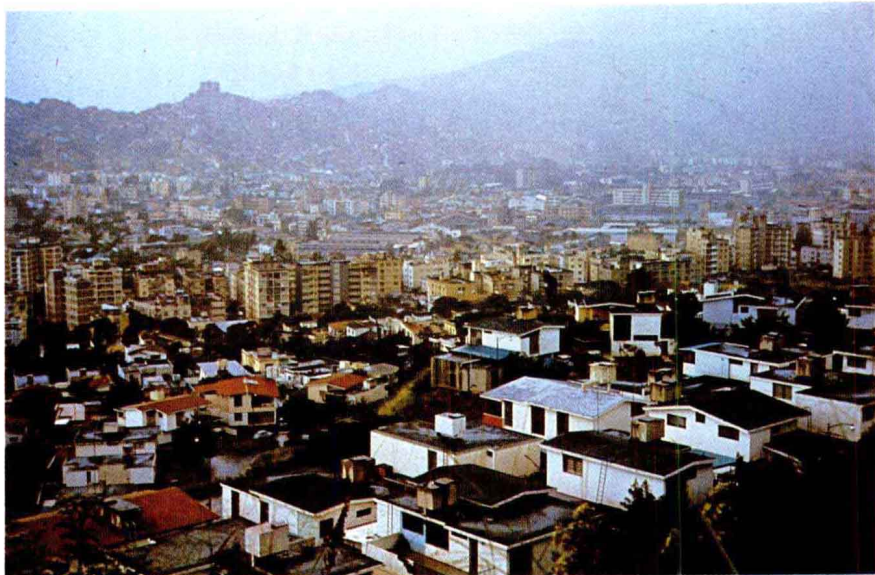
唐糸草紙 からいとくし 室町時代の短編小説。御伽草子二三編の一つ。作者・成立年不明。木曾義仲に仕える手塚太郎の娘、唐糸は義仲の命令で源頼朝の命をねらい、見破られて石牢に幽閉される。信濃国（長野県）にいた娘の万寿姫は母のゆくえをたずねて鎌倉に上り、苦心の末、鶴岡八幡宮の舞姫となり頼朝を感動させ、その賞として母の命を許される。『二十四孝』『蛤の草紙』などとともに中世流行の孝行談の代表作。舞姫説話。木曾義仲関係の時代物で、『大橋の中将』などとも類似する。〔市古貞次〕

カライル Thomas Carlyle（トマス・ハ―）イギリスの批評家・歴史家。スコットランドの寒村に生まれ、ビューリタンの家庭に育ち、エジンバラ大学に学んだ。思想上の懐疑に悩み、学校教師となったが長続きせず、ドイツ文学と観念論哲学を研究して文学に志した。一八二六年結婚、人里離れた農園に住んで思索に没頭した。三二年から『衣裳哲学』を雑誌に連載し、大自然は神の衣服であり、すべての象徴・形式・制度は架空の存在にすぎないとい説いて、経験論哲学や功利主義に挑戦した。この後興味は歴史へと移り、一八三四年ロンドンに出て、『フランス革命』（一八三七）を完成して名声を確立。革命を支配階級の悪政に対する天罰だとして支持する一方、英雄の指導者の必要を唱えた。このころからしばしば文学や政治上の時事問題について公開講演をおこなった。『英雄と英雄崇拜』（一八四一）はもっとも好評を博した講演で、英雄は宇宙の秩序を感得し、これに誠実をもって応ずる勇氣ある人々であると論じ、歴史における個人の力を強調した。『チャーチズム』（一八五二）と『過去と現在』（一八五三）では、労働者階級の現状と未来を論じたが、労働者の生活状態に同情はしながらも、人間の救済は強く正しい英雄の支配と中世のごとき秩序ある経済生活によってだけ可能だとい、普通選



不明。木曾義仲に仕える手塚太郎の娘、唐糸は義仲の命令で源頼朝の命をねらい、見破られて石牢に幽閉される。信濃国（長野県）にいた娘の万寿姫は母のゆくえをたずねて鎌倉に上り、苦心の末、鶴岡八幡宮の舞姫となり頼朝を感動させ、その賞として母の命を許される。『二十四孝』『蛤の草紙』などとともに中世流行の孝行談の代表作。舞姫説話。木曾義仲関係の時代物で、『大橋の中将』などとも類似する。〔市古貞次〕

小 日本古典文学全集36 御伽草子集（一九七二）



カラカス 東西に長くのびるカラカス市の東部新市街区をのぞむ。手前のスベイン風建物は中流階級の住宅群

挙にもとづく民主主義と自由放任経済をてきびしく批判した。その後、『クロムウェルの書簡と講演集』(公刊)の編集や『フレデリック大王伝』六巻(八六〇年)などの著作がある。一八六五年、エジンバラ大学の名譽総長に就任、翌年、夫人が死去したあととみるべき仕事を残さなかった。イギリス人としては珍しい観念論的思索は、科学思想と功利主義に圧された信仰心の衰退の間隙について、ビクトリア朝の人々に訴えたが、その反民主主義的見解はついに主潮とはなりえなかった。日本では、内村鑑三・新渡戸稲造ら、明治の知識人に深い影響を与えた。(宮下忠之)

石田憲次郎『衣服哲学』(岩波文庫)▽宇山直亮・入江勇起男他訳『カール・マルクス選集』全六巻(二六三・日本教文社)

カール・マルクス Carlisle イギリス、イングランド北西部にあるカンブリア州の州都。人口七万一千四百七十七(一九七〇)。ソルウェー湾に流れるエデン川に二つの支流が合流する地点に近く、交通の中心地。ローマ人の植民以来の古い歴史を持つが、その後デーン人の侵入、スコットランドとイングランドの争いなどで破壊を受けた。付近の工業地帯の中心として重要で、織物・食品工業・鉄鋼業・機械工業も盛ん。市の中心の大寺院は、一二世紀に起原をもち、著名である。(井内 昇)

カラカス [唐鰯] *Eloia nachua* 硬骨魚類・カライワシ科の海水魚。太平洋側は千葉県、日本海側では、富山県以南、中国・フィリピン・インド洋・マダガスカル・アフリカ東岸に分布する。体長三〇センチに達し、体は細長く、やや側扁する。目に脂腺(しせん)があって、口は大きい。鱗は小さい円鱗。体色は背方が暗青色で、腹方が銀白色。レプトセファルス *leptocephalus* 型の幼魚をへて親になるが、この幼魚は無色透明なリボン状で、尾びれはウナギのレプトセファルスのようにとがらず、成魚のようになら二つに分かれる。食用にされる。(山口吉昭)

空売り からうり 株式の信用取引や繊維・砂糖・生糸・穀物などの定期商品取引において、株や商品の現物を持たずに証券会社や仲買人に一定率の証拠金を差し出すだけで売ること。相場が下がれば買戻して決済し、利益を得られるが、反対に大幅に値上がりすれば、証拠金まで損失することになる。空売いの対語。(曾我春一)

唐絵 からえ 中国からもたらされた絵。転じて日本でつくられた中国風の絵画をいう。平安前期ごろまで日本絵画の主流をなしていたが、中期ごろからさかんになった日本風の絵画(大和絵)に对照するため、唐絵なる呼称が生まれた。文献上では現在のところ、寛平年間(八九八)の『北山抄拾遺雑抄』に見られるのがはじめてである。唐絵と大和絵の区別は主として題材の面からなされ、中国の風物を扱ったものを唐絵とよんだが、さらには中国の技法のいちじるしいものをも称したらしい。奈良時代の遺品としては正倉院の『樹下美人図』などいくつかをあげることができ。平安時代のものでは教王護国寺(東寺)の唐観人物画があり、また絵巻の画中画や文献などからさかんにつくられたことがわかる。なお鎌倉時代以後、宋・元から移入された水墨などの中国画風のものをも称する場合があるが、これは漢画とよぶのがふつうである。(奥平英雄)

カラ映画 ーえいが 彩色映画

唐織 からおり 中世以後、中国で製織されて日本へ渡来した織物の総称。そのうちとくに三枚綾組織の地に、模様には各種の色糸の絵線(えせん)で浮かし、金銀糸は地がらみで押え、華麗な模様をあらわした織物をさすことがあり、能装束(のうそう)のうしろの表衣につかわれたことから装束名となった。(角山幸洋)

唐傘 からかさ 和傘の雨傘で、その語源は唐茄子・唐辛子・唐草と同様に中国からの舶来品であることを示す。雨具の蓑笠に代わって一般に用いられたのは江戸時代で、白の和紙に桐油を引いたのが番傘で柄も粗雑であるが、家紋を入れたり、周囲を紺にそめて白抜き(はくぬき)の目にしたのが、蛇の目といわれ、細身の柄の握りに藤をまき、ろくろの上部に糸飾りをほどこした高級品である。(遠藤 武)

カラサクラゲ [唐傘水母] *Litopha tetrahapla* 腔腸動物・ヒドロ虫綱・硬クラゲ目(一種)。傘はいわゆる「からかさ」の形をし、直径は三・三〇センチになり、寒天質は厚い。色は無色が多いが、ときに紅色のこともある。触手は八本あっていずれも細長



カラサクラゲ 唐傘に似た大形のキノコ

い。傘の中央から筒状の長い口柄(くちばし)のびて先端に口が開き、その手前に胃がある。日本沿岸にふつうな種類で、秋や冬には大形の個体が現われる。このクラゲには着生生活するポリプの時代がない。(今島 実)

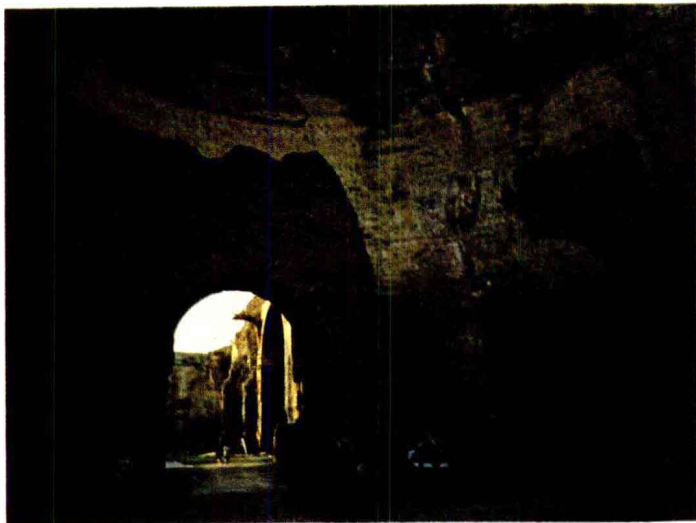
カラサクラゲ [唐傘茸] *Litopha procera* (Fr.) S. F. Gray 担子菌類・ハラタケ科のキノコ。高さ三〇センチ、傘の径二五センチに達する大形キノコ。若い傘は褐色、径三センチほどで球状にすぼみ、茎の頂端につく。柔軟な海綿状で握っても砕けない。傘は開くにつれて表皮は裂け、大きな褐色の鱗片となり、白い地肌をあらわす。ひだは白く茎に隔生する。茎は長大、根もととは球状にふくらみ、表面は褐色、細かく亀裂し、上端に指輪状のつばがある。胞子紋は白。夏から秋、林内の地上に発生する。分布は世界的に広く、欧米でもバラソリマッシュルームと俗称されて親しまれている。食用にされる。(今岡 六也)

傘亭 からかたて 京都市東山区下河原町八坂の高台寺内南部山上にある茶亭。西に時雨亭があり土間廊でつながれている。もと伏見城内にあり、一六〇五年(慶長一〇)の高台寺の建立以後、移建されたものと伝称されている。一六八五年(貞享二)発行の高泉禅師の『洗雲集』には、松林中に亭があり、草を薙ぎ竹をして地としたはなはだ朴略の亭としるされ、一名安閑窟(あんくわく)という。利休のつくったものと述べているが、屋根はかやぶき寄せ棟で、内部は傘をひろげたように丸竹を用いた化粧屋根裏をみせているので、この名がある。内部は六畳とされるが、後世の改造が多い。

カラカス Caracas 南アメリカ、ベネズエラ的首都。人口一六六万二千七(一九七〇)隣接する諸都市をあわせると二六〇万に近い大都

市で、中央高地の標高約一〇〇〇mの高原に位置する。周囲を山でかこまれ、自然的には中心的环境をもたないが、快適な気候にめぐまれ、近代的な大都市に発展した。とくに一九五〇年代の人口増加と市街の景観の変化はすさまじいものがあった。ベネズエラの石油ブームを背景にして、首都の建設計画が実施され、超モダンな建物がぞくぞくと建てられ町の様相が一変した。首都としての政治施設をはじめ、教会堂・大学・博物館・劇場などの広大な建物・街路・公園などがスペイン風の都市美をつくり出している。市は一五六七年に創立され、一七三一年以来南米北部の植民地の中心となり、また独立運動の指導者シモン・ボリバルの誕生の地で、彼の指揮のもとにスペインに反抗を開始（一八二〇）した最初の植民地であった。一八三〇年ベネズエラ独立以来の首都でボリバルや独立戦争に関する記念物が多い。工業都市でもあり、製糖・食品加工・醸造・皮革・製紙・タバコ・ガラス

カラカラ ローマに残るカラカラ浴場の遺跡



製品・繊維・薬品などの工業が発達している。コーヒー・カカオ・タバコなどの農産物の取引地でもある。外港ラグアイラ La Guaira（北方二二km）と高速道路および鉄道で結ばれている。

唐金 からかね 青銅

カラカネトノボ 「唐金蜻蛉」 Cordulia aenea トンボ類・エゾトンボ科の昆虫。北海道・本州の山地帯およびサハリン（樺太）・シベリア東部などに亜種 *amurensis* が分布し、原種はヨーロッパ産。腹長三〇mmぐらゐ、はねの長さ約三〇mm。体は細毛が多く、金属緑色に光り、腹部は後方で少し太くなり、第二節後縁と第三節の背板下縁は白い。本州の中部では高地の湿原の代表的な種類で六〜七月ごろに現われ、開けた池沼の水面を巡回して飛ぶ。

唐紙 からかみ (1) 遣唐船によって唐土から渡来した紙。奈良時代には、日本でつくられる紙とは比較にならないほどすぐれていたが、平安中期には、日本の製紙技術をもすすみ、『源氏物語』は唐紙をもういとい、紙・屋紙のほうを高く評価しているが、一般には珍重されていた。(2) 唐紙障子の略称。唐紙をはってつくったふすま障子。現用のふすまで、絹ばりのものに対していう。

カラカラ Caracalla (一六一三) 本名マルクス・アウレリウス・セプティミウス・アントニヌス Marcus Aurelius Severus Antoninus (一六三〜一八〇) 皇帝(在位一六八〜一八〇)。セプティミウス・セベルスの子。リヨンの生まれ。共同統治者、弟ゲタを殺して単独支配者になり、財政上の理由から、帝国内の全自由民



にローマ市民権を与えた(三三・カラカラ勅令)。人心を掌握するため大浴場を建設し、兵士に対する支出の増大を補うため増税、貨幣の改悪をおこなった。現在もローマに残るカラカラ浴場の遺跡のスケールの壮大さは、往時をしのばせるものがある。〈長谷川博隆〉

カラカラ Caracalla 鳥類・ワシタカ目のうちハヤブサ科に属するカラカラ亜科の総称。北アメリカのフロリダ・テキサス・アリゾナの各州で、鳥類保護で著名なオーデューボナが一八三一年に発見したオーデューボナカラ *Polyborus cheriway* 一種と、中南米に七種が分布する。

体長四〇〜五〇cmで脚はやや長く、爪やくちばしはあまり鋭くない。獣類の死体やトカゲ・昆虫などを雑食するが、攻撃性が強く、死体に集まるクロコンドルなども襲って餌を横領したりする。羽色は翼に白斑があるなど目だつものがあり、地上性と樹上性の種がある。目からくちばしにかけては裸出し、赤や黄色で独特の荒い顔立ちをしている。英名は土名に由来する属名 *Caracara* を用いているが、そのガラガラと聞こえる声、あるいはスペイン語(ポルトガルも同様)の *cara* (顔) *Caracara* で面と向かうの意)から名づけられた名と思われる。メキシコのグアダルーペ島のものはヤギを襲うために駆除され、一九〇六年絶滅した。

黒田長久

がらがら 柄つきの丸い胴に球を入れ、振ると鳴る育児玩具。室町時代、京都の御所の女官が紙製のものをつくったのが最初という。江戸時代には、張り子・曲げ物・挽き物の胴に小石・土鈴入りのものがあり、明治以後はブリキ製で柄に笛つきのものや、大正期にはセルロイド製が流行した。戦後はプラスチック製のものが出回っている。〈斎藤良輔〉

ガラガラヘビ rattlesnake 爬虫類・クサリヘビ科のマムシ亜科に属する毒ヘビの総称。北アメリカからメキシコをへて南アメリカに分布し、草原や乾燥した砂地などにすむ。二属六〇種以上が知られており、北アメリカに多い。この類はすべて管牙をもつ毒ヘビで、頭は三角形にふくれ、マムシやハブに似たまだら模様があり、尾端部に一〇〜二〇の角質輪が連なっている。この尾端は中空に

なっていて、強く振るとこの輪がぶつかり合ってガラガラあるいはシューシューという音を発するが、これは年二〜四回の脱皮ごとにその一部が残留してふえてきたものである。発する音は一種の威嚇であるらしい。名はこの音に由来する。しかし、咬みつく前にはかならず鳴らすということは迷信である。

ダイヤモンドガラガラヘビのように、大きい種類では体長二・四mになるが、ヒメガラガラヘビでは五〇cmぐらゐである。毒は出血毒で、その強さは種類によって多少は異なるが、ほとんどが猛毒で、かまれると一時間後には死亡する。食物はウサギ・ネズミなどである。

ヘリチャード・ゴリスン

カラカル Caracal / Caracal caracal 食肉目・ネコ科の哺乳類。インド南西部のマハラシュトラ州およびヒマラヤ東部を除くインドからイラン・イラク・アラビアをへてアフリカ大陸まで分布し、草原や低木林にすむ。頭胴長六〇〜七五cm、尾長二三〜二五cm、肩高四〇〜四五cmほど。オオヤマネコに似ているが、やや小さく、尾が長く、頬のまわり長毛のひげがない。三角形の耳の先端に長い黒色の毛房があることはオオヤマネコに似る。毛はオオヤマネコほど密でない。体の上面は一般的な赤みをおびる淡褐色から赤褐色まで変化に富み、下面は淡い赤褐色または白色。ときに不鮮明な赤褐色の斑紋を示す。四肢と尾は体と同色で、ときに尾の先端が黒色。歯式は 3.1.3.3.1 で合計二八〜三〇本。

レイヨウ(羚羊)類、小形のシカ類、ウサギ類および鳥類を捕食する。跳躍力が強く、地上・一・五〜一・八mの高さを飛翔中の鳥も捕えうる。チータと同様に人になれやすく、インドではウサギや鳥などを捕えるために飼育して訓練する。年中出産可能で一産二〜四



